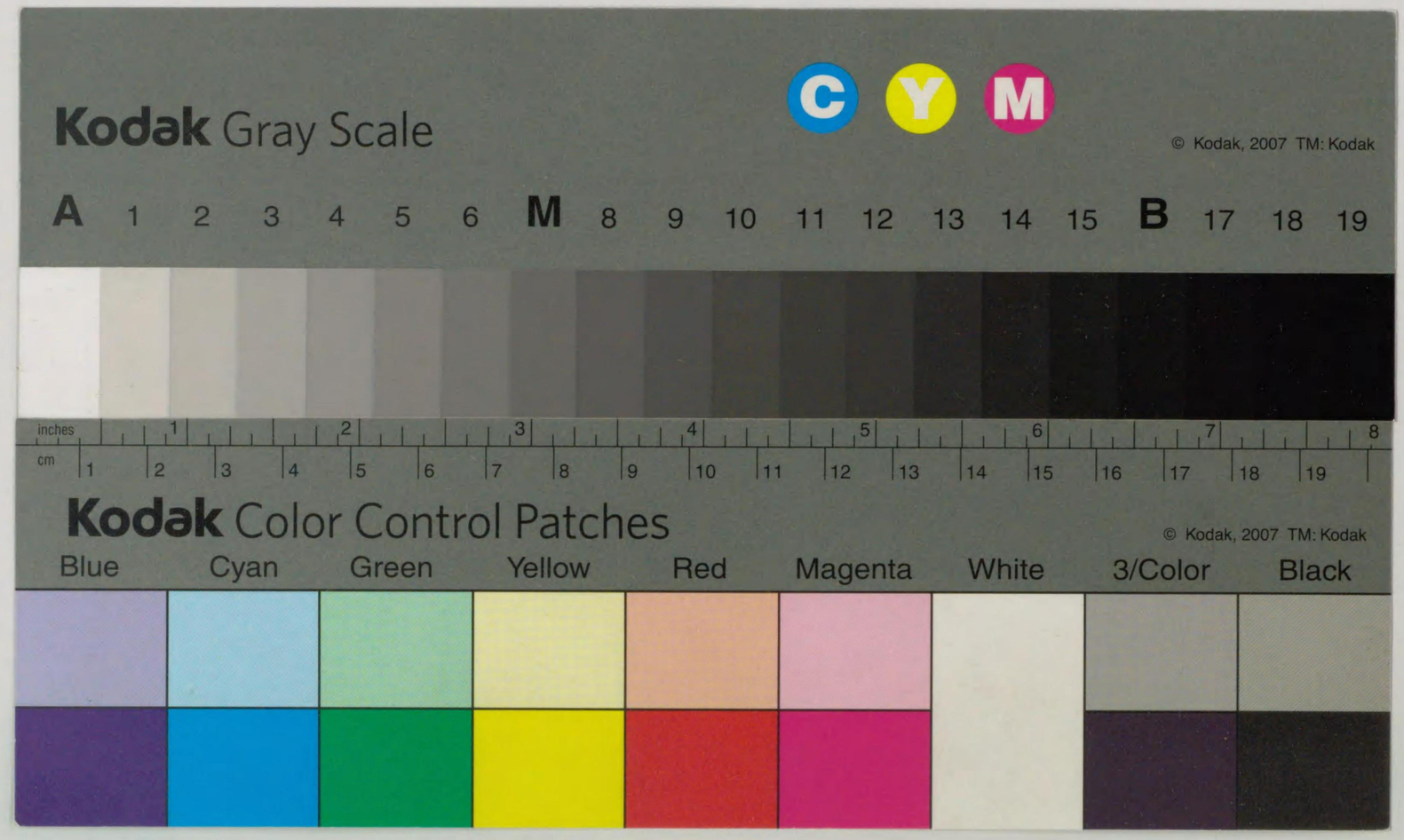



762-621
12005015972 37

127

山田孝雄著

# 國學の本義

畝傍書房版

帝國圖書館藏

# 序

本書はもと昭和十四年に國學研究會の要求により既に發表したるものゝうち同會の目的に副ふべきものを選びて之を編し一册子の形にして出版せしめたるものなり。然るにその書は既に盡き、頻繁に至る所の世の需要を充たすこと能はずして兩三年になりぬ。

今夏緣ありて、畝傍書房主山縣氏の力を藉りて再び世に送ることを得るは道の爲に悅ぶべきことなり、玆に原版の誤脫を訂して世人の需に應ぜむとす。

聊かその事を叙して序に代ふ。

昭和十七年七月十一日

山田孝雄

# 目次


○一　荷田東麻呂創造國學校啓……三
○二　荷田大人の創學校啓について……一三
○三　國學とは何ぞや……二三
○四　國學の眞髓……六三
五　國學と教育……八七
○六　古史徴開題記について……一七三
○七　日本諸學講座總論……一九七
八　平田篤胤、撰古史之時祈願神等詞……二一七

# 荷田東麻呂・創造國學校啓

春葉集附錄 ═ 複寫

附録

謹請蒙　鴻慈創設國學校啓

荷田東麻呂

誠惶誠恐頓首頓首謹聞伏惟

神君勃興山東覇功一成平章天下艸上之風孰越君子之志維新之化始建弘文之館庶矣且富又何之加

明君代作文物愈昭光烈相繼武事益備濟濟焉蔚蔚焉鎌座氏之好儉庸何及于斯乎郁郁乎斌斌乎室

町氏之尚文豈同日之談哉應此昇平之化天生寬
仁之
君以其天縱之資國見不嚴之教野無遺賢做陶唐之
諫鼓朝多直臣擬有周之官箴上尊
天皇專不諭之政下懷諸侯而來包茅之貢道齊有暇
則傾心於古學敎化不周則深治於先王購奇書於
千金天下聞達之士嚮風探遺篇於石室四海異能
之客結軾臣嘗遊都下之日幸蒙射策之捷忝不顧
謭劣之義偶有校書之　命浴于忘布衣之恩誰爲
爲之誰令聽之子遷氏之言深有取焉雖有智慧不

如待時鄒孟子之意良有以也當時既有意於賴
幕府之威靈起此大義借
大樹之庇蔭達臣素願而不敢者私心竊以趦步不已
跛鼈千里犬馬之年未滿六十今日之美安知不爲
異日之醜後進之知豈識不如先輩之能愚而自用
難免蟷斧向車之謗賤而自專似忘燕石衒人之羞
有志而不遂千里遲遲歸豈圖卒有採薪之憂騏驥
徒伏槽櫪之間何意爲造化小兒苦溺鵠長繫樊籠
之中口不能言同陳仲子之居於陵脚不能行似下
和氏之在楚山爲世廢人噬臍何及遇時窮阨嗟眉

獨泣天之將喪斯文也命也天之未喪斯文也時也
時之不可失不敢不告也今也洙泗之學隨處而起
瞿曇之教逐日而盛家講仁義步卒廝養解言詩戶
事誦經閭童壺女識談空民業一改我道漸衰紀土
州嘗嘆焉田園競捨資產傾盡善相公深痛矣臣竊
以是亦足以見太平日久之象唯有爲可痛哭長太
息者在我

神皇之敎陵夷一年甚於一年

國家之學廢墜存十一於千百格律之書氓滅復古之
學誰云問詠謌之道敗闕大雅之風何能奮今之談

神道者是皆陰陽五行家之說世之講詠謌者大率
圓鈍四敎儀之解非唐宋諸儒之糟粕則胎金兩部
之餘瀝非鑿空鑽穴之妄說則無證不誓之私言曰
祕曰訣古賢之眞傳何有或蘊或奧今人之僞造是
多臣自少無寢無食以排擊異端爲念以學以思不
興復古道無止方今設非振臂張膽辨白是非則後
必至塗耳塞心混同邪正欲退則文已漂巳晦欲進
則老且病且憊猶豫無所決狼狽失所爲伏此請望
或京師伏陽之中或東山西郊之間幸賜一項之閑
地斯開

皇國之學校然則臣自少所蓄祕籍奥牒不少至老所
訂古記實録亦多盡皆藏于此備他日之考索僻邑
之士爲絶難及者或有寒鄉之客有志而未果者間
多借之讀之才通一書百王之澆醨此知洞覽千古
萬民塗炭可拯幸有命世之才則盡敬王之道不委
于地若出啄玉之器則拂本氏之敎再奮於邦六國
史明則豈翅
官家化民之小補乎三代格起則抑亦
國祚悠久之大益哉萬葉集者國風純粹學焉則無面
墻之譏古今集者詞詠精選不知則有無言之誠夫
本邦設施學校權輿于近江
朝廷主張文道濫觴於
嵯峨天皇菅江家有分彰院源藤橘和繼起太宰府有
學業院足利金澤延及然所藏三史九經陳俎豆於
雍宮其所講四道六藝薦蘋蘋於孔廟悲哉先儒之
無識無一及
皇國之學痛矣後學之鹵莽誰能歎古道之潰是故異
敎如彼盛矣街談巷議無所不至吾道如此衰矣邪
說暴行乘虛入憐臣愚衷創業於國學鑑世倒行垂
統於萬世首創難成功非經國大業邪繼續易用力

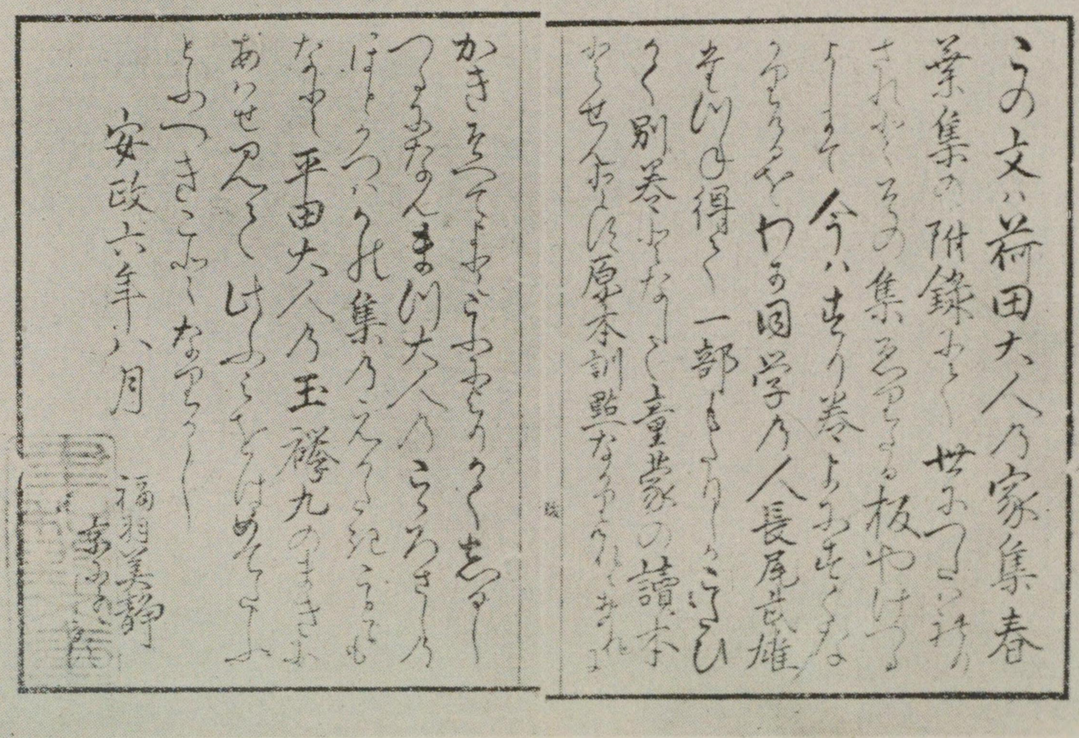
眞不朽盛事哉臣之至愚何之知所不敢自讓者語
釋也國字之多紕繆後世猶有知之者典籍猶存古
語之少解釋振古不聞通之者文獻不足國學之不
講實六百年矣言語之有釋僅三四人耳其爲巨擘
新奇是競極無超乘骨髓何望古語不通則古義不
明焉古義不明則古學不復焉先王之風拂迹前賢
之意迸殺古由不講語學是所以臣終身精力用盡
古語也伏以斯文之興廢固在此舉之取之與
捨願
閣下留意幸察臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言

寛政十年戊午孟秋發行

平安書肆

吉田四郎右衛門
木村吉右衛門
林伊兵衛
熊野儀兵衛
野田儀兵衛
佐々木惣四郎

# 二　荷田大人の創學校啓について



762
62

今、こゝに掲げたるものは春葉集の附錄として刻せられたるものなり。春葉集は荷田春滿の家集にして、寛政十年に刻したるものなり。この啓文は一面に於いて、國學の精神と目的と研究法とを明かにしたるものにして、實に國學そのものゝ精神的基礎一にこれに存するものなればこれを熟讀玩味することこれ國學の第一歩といふべきなり。この啓文の精神に基づきて發展したる國學は賀茂眞淵によりて古語の研究を主とするものとなり、本居宣長によりて古典の研究を主とするものとなり、平田篤胤によりて古道の研究を主とするものとなりぬ。而して、これ實にこの啓文の指南する所の具現せるものなりとす。國學は實にかくの如くに開展せるものなるに往々その山口たる詞章の學たるに止

まるおそれあり。眞淵の門人に既にその弊あらはれ、本居の門人五百人一人も道を傳ふるもの無きの慨をあらはせり。平田篤胤は本居の沒後二十三年に服部中庸より本居の本旨を傳へられ蹶然として道統を既に絶えなんとするに繼ぎたり。しかもその頃に到りては國學の本旨がこの啓文に存することを知れるもの稀なるさまになりぬ。篤胤之をうれへ玉襷に於いて之を引きて講ずることありしは當然の事とはいひながら世の蒙を啓きしこと少からずといふべし。次に玉襷九之卷よりその文を抄出せむ。

偖その官に上られし書は、かの春葉集の附錄に出せるが、其初めに、謹請蒙鴻慈創造國學校啓、荷田東麻呂誠惶誠恐頓首々々謹聞とかき出して（啓文略）と記されたり。此は世の學者などの机により子弟に對して、誇言慢語する類には非ず。畏くも官に白せる文なるに、先儒の國學校を興さず、漢學校を興せるを無識と稱し、其儒學を異教と稱して、古道學を興すを經國の大業と稱せるなど實に舌の卷るゝ語等なるが、岡部大人の學は、この大義の筋骨を受得られてぞ有ける。

といひたるが、その下に注して曰はく、

今の世に古學と稱して歌道を立る徒、蟻の如く多かるに、其先生たちの傳を物するに、契冲、縣居、鈴屋をし三哲など稱して、此大人の事をば、都に稱する者なきは其徒みな歌作者にて道の本義を知ざる故に歌學の方より然は思ふにぞ有ける。契冲は佛者にし有れば然ても有なむ。縣居、鈴屋の二翁をし、歌もて稱せむは、其本意に違ふことなり。我が黨の小子、よく此旨を思ひて荷田大人の御蔭をも常忘るまじき事なり。然るは此大人、その書きと書れし物ども、思ふ旨ありて世に傳へられざる故に、今現にその御蔭を蒙るとしも思はねど、其鈴屋の說は縣居よりいで、縣居の說は此大人に數年從ひ學ばれたるに出で、次々に委く調へる物にし有れば、まづ其本を思はでは有まじき謂にこそ。其說の今に傳はるは鮮けれど、今擧る上書の文を見ても、其垂統せられし恩義はしるく、かつ其大義に深く思ひ入られし大倭心ぞ、やがて皇國學びの良師には有ける。其は今し此にかく云ふ由は已はやく藏たりし春葉集をかし失へれば、相知れる人々に借らむと欲るに、持たる人なく、此

集の有としも知ざるも多かれば、本屋どもを尋ねて辛くして古本の虫食たるを得たるに、慷慨の心おこりて後學を驚かさむと、かくは記しつ。

といへり。かくしてこの啓文また學者の間に注意せらるゝに至りしなり。然るに明治のはじめ、世改まりて人心浮華に流れ、國家の學再び地に墜ちむとして、世に顧みらるゝことなく、はてはこの啓文を以て平田派の人々の僞作なりなどいふ妄說を、國家の設けたる帝國大學の講堂に於いて講ずるが如き妄人の跋扈する世とは成りぬ。彼の妄人は寬政十年に刻せる春葉集を見ざるなり。その春葉集を見ば平田篤胤が未だ國學に志を傾けざる前に既にこの啓文が世に公にせられたるを知るべきに、それをも知らずして放言するは抑も之を何とか評すべき。

抑もこの啓文の稿本は別に荷田家に現に保存尙藏せらる。それとこの春葉集なるとは文字の異同少しく存すといへども、世に公に示されたるは春葉集の附錄なるものにして、これこそ公のものといふべきものなれば、今それを寫眞にとり複寫して揭げたり。而して、それが寬政十年の版本なることを明かにせむが爲に卷末の寫眞一葉を附す。さてこの啓文は春葉集の後には長尾武雄、福羽美靜が心を合せて板に鐫らしめたる本あり。これは半面六行、一行十一字の紙十一枚より成れるものにして、末に跋あり。その跋文次の如し。

この文は荷田大人の家集、春葉集の附錄にて世につたはれり。されとそのの集ゑりたる板やけつるよしにて今はすり卷よにすくなかりけるをわか同學の人長尾武雄たつね得て一部もたりしか、こたひかく別卷となして童蒙の讀本とせんとす。原本訓點なかりけれとおのれにかきそへてよとこふによりてかくしるしつるになん。まつ大人のこゝろさしのほと、かつはかの集のゑかたきことゝもなと平田大人の玉襷九のまきにあはせ見て、此ふみをはめてたふとふへきことなりかし

安政六年八月　　福羽美靜　京にてしるす

とあり。當時その世に稀なりしさま見るべし。然るにその版も亦燒けたれば平田塾にて更に版を刻せり。その平田本は半面七行、一行十七字にして七枚よて

り成れり。これにも訓點を加へたり。本文は平田鐵胤の書にして、同じ人の序あり。その序に曰はく、

此文は荷田大人の家集、春葉集の附錄なるが、早く板本と成て世に出ては有つれど、知れる人の少かりしを、我先人の玉手次に、此大人の御傳を撰まるゝに付て、此を引出て委く講示され、世に古學すとふ人々の大抵は歌文の遊業にのみ心を用ひて、眞道を思はざるが多かるを甚く慨み憤りて、抑〻此文はしも、畏けれど、神に、皇に國に忠義なる御心の著明ければ、眞の古學ぶ輩は朝暮に戴持て、ゆめ忘るまじき物なる事も、又此大人は我古學の御祖なる事も、委く懇に諭し置れたるが如くなれば、今更に申すに及ばず。己常に、この御文を戴き讀ごとに、見る毎に、其事の成敢ずて、現世を退り給へる事の悲く口惜く思ゆる儘に、いかで此を別刻て童蒙の讀本と爲し、其御心を普く人に知らせてましと思へるを學業の事繁きに事成しあへず過つるを長尾武雄が、一速く思ひ起して、福羽美靜とも談らひて嚮に板本と爲て世に弘めつるは最愛き業なるが去し甲子歳の災害に又其彫板の燒失たる由なるはいと慨き事と思ゆる時しも、信濃國人櫻井房光が再び此を彫成さむと願出つるは魂相へる事と悅びつゝ斯は世に弘むるになむ。時は慶應の二とせと云年のしも月、平鐵胤

とあり。かくてこれが平田塾の藏版として今も世に行はるゝなり。平田派の僞作なりといふ妄人はこの最後の板本一種を見て他を知らざりしものならむ。

# 三、國學とは何ぞや

これは昭和九年十二月發行の雜誌「國學」の創刊號に載せたゝものなり。この雜誌は日本大學國文學會の發行せるものにして、その名を國學と命じたるに因りて、この題目をとりて國學の說明を施したるものなり。かくて、この册子の發端にこれを置くは全篇の意味こゝにあるがふさはしきによる。

この雜誌が「國學」と命名せられて、はじめて世に出ることになつたについて、私はその名とする所の「國學」とは何ぞやといふことを述べてみようと思ふ。最もこの命名は雜誌の企ての成就の後に與へられた名であつて、國學といふ名目の雜誌を出さうとはじめから委員諸士が目論んだものでは無かつた。然るにそ

の雜誌の名を定める場合にこの名が擇ばれたといふのである。この命名の決定には私は直接には參加しては居ない。隨つて、雜誌の名目の國學といふ語と、私のこゝにいふ所の議論とは必然的の關係は無い。私は私の平素考へてゐることをこの機會に述べるのであつて、必ずしも、この雜誌が、全く私の考へと同一だといふことは出來ないであらうし、私も亦之を强ひようとは思はない。たゞ私は私のいふものが國學の本旨に近いものであらうと信じて疑はないといふことを明かにしておく。

國學といふ語は何を語るのであるか。大寶令には諸國の學校を國學と唱へたが、それをさすのではない。鎌倉時代頃に有職の事を國學と云つた例もあるが、今日われ〳〵のさす所はそれとも同一でない。今日いふ所のものは荷田春滿によりて提唱せられ、賀茂眞淵によりて繼承せられ、本居宣長によりて大成せられ、平田篤胤によりて擴張せられた一系の國學をさすのである。こゝにいふ所の國學といふ語は實に荷田春滿によつて提唱せられたもので、その國學といふ一定の學問もこゝに生じたと云つてよいものである。さうしてこの國學が、賀茂、本居、平田の諸先生及びその門流によつて天下に廣く行はれ、その同志がわが國內に充ち、それらの人々の活動が明治の維新を導く原動力となつた。もとより明治の維新は內外種々の衝動によつて導かれた結果であつて、たゞこの國學の力だけで生じたものとはいはれない。しかしながらそれらの種々の動力のうちに於いても、國學が最も有力なものであつたことは、今こゝに一々證據をあげるまでもなく明々白々のことである。

國學はかくの如く明治維新の原動力をなすほど、有力なものであり、又活潑なものであつたが、明治維新以後、多くの歲月を經ないうちにその活力を失つてしまひ、今日に於て國學の名目は殘つてゐても、たゞ古い語とか古い物語とか、歷史とか若くは神道とかいふことを隅の方にかゞまつて小い聲でぐず〳〵いうてゐる學問の如くに見られてゐて、國家の進運と無關係の如くに思はれることになつた。これは現在でもまだその通りと言つてよい有樣である。この雜誌が自ら擇んで國學と名づけたのは、果してこのやうな隅の方に小さくなつていぢけてゐることを欲する爲に特に名づけたものであらうか。これは決してさや

うなことではあるまい。新進氣鋭の寧ろ血氣盛んな委員諸士がさやうないくぢの無い、繼子あつかひを受けることを目的としてこの雜誌を發刊せうと企てたものでないことの、明かであることはいふまでもない。然らばこの雜誌の目ざす國學といふものは、この新進氣鋭の士にふさはしい活潑な氣力に富んだ學問であらねばならぬ譯であるに相違ない。

國學は明治十五六年頃から後は殆んど瀕死の狀態に陷つてゐる。さうして社會の隅の方にかゞまり、虫の息で、やうやう命をつないでゐるといふ有樣であつて、社會國家はこれを見ること路傍の人の如く、冷淡であつた。たま〳〵國學などいふことをいへば、國語、國文、國史の大家先生などまでが、先に立つて冷笑したものでさやうな事をいふものは莫迦の標本とも見られたやうだ。この事は私自身にもかやうな侮辱をうけた經驗があるによつて決して虛言ではない。

そも〳〵國學をしてかやうな侮を受けしめ、かやうに衰へさせたについては、われ〳〵國學者にも責任が無いとはいはれない。しかしながら、明治十年頃からの上下一般のとつた歐化政策が極端にわが國粹の破却に力を致した結果といはねばならぬ。當時の政府の眞の目的はどこに在つたか、それは局に當つた人でなければ、わからないことであるが、その頃の志ある人々をして、政府は神社をして自然消滅に歸せしむる方針であるのでは無いかとまで心配せしめたものである。一國の宗祀たる神社に對してさへこの方針に出た政府が、國學などに目もくれなかつたのは寧ろ當然であつたらう。そこで社會も國家もたゞ、西洋化することを行動の第一義とした。それ故に、西洋にその名も實もない神社とか國學とかいふものが、一も二もなく、舊來の陋習の見本の如くにでも見えたのかも知れない。

かやうに思はれ、かやうに取扱はれては、意氣地の無いものはこの境界から最先に逃げ出すことは當然であり、稍氣概のある人々も最初の間にこそこれに對抗もしたであらうが二十年、三十年と續いては氣力も盡きたであらう。最も、どこまでも踏みとゞまつた豪傑も無かつたとはいひ得ないであらうが、それらの豪傑の士は果して、明治維新を指導した從前の國學はた國學者ほどの氣力なり、活力なり、又實力なりを發揮し得たかといふに、遺憾ながら私は然りと答へるこ

とを得ないことを見てゐる。こゝに私は國學者その人々の責任が存すると思ふのである。それは一寸考へてみてもわかるのであるが、歐化政策の大波濤が押し寄せて來た時にこれを打倒せうとするものは、その歐化政策の誤りである事を敵者に認識せしめなければならぬのであるが、國學者がたゞわが國古來の事實を例示するに止まる位であつたら、どうしてこれを喰ひとめる事が出來るか。これら歐米第一主義の謬想の根本を指摘するには、明治以前に起つた思想だけを以てしては何ともすることが出來なかつたのは當然である。凡そ國學といふ學問が何の爲に起つたのであるか、又どういふ風に發展してきたかといふ事を考へてみるならば、この明治維新以後にはその時世にふさはしく、又その時世を指導するに足るだけの實質が無くてはならなかつたのであるが、明治維新以後の國學にはこの活力が一も見られないし、又國學者にそれだけの修養が無く、又それだけの見識も無かつたと思はれる。かやうな有樣では社會國家の進運を指導するどころか、社會國家から置き去りにせらるゝも亦或は尤もといはねばならぬ點もある。それ故に明治以後の國學の衰運は國學者自身と社會國家との二者の責任にあると思ふのである。

かやうに考へて來ると、こゝに國學とは何ぞやといふ問題を是非とも明かにせねばならぬ。それについては今日普通の人が國學といふものを何と考へてゐるであらうかといふ點も顧みる必要がある。今の人の國學と考へてゐるものゝ範圍は何であらうかといふに、今その一例として國學者傳記集成といふ書を見よう、これには慶長五年に歿した中院通勝からはじめて、明治三十六年に歿した落合直文まで六百八十餘人の傳を集めてある。されば、この書に載せた人人はみな國學者であり、その修めた學問はみな國學といふべきものであると、この編者は認めたものであらうし、又この書の檢閲者及び之が序をものした學者も亦さうと認めたものであらう。しかしながらこの書に載せた人々はすべて皆果して、國學者といひうるであらうか。たとへば、江戸名所圖會、東都歳事記を著した齋藤幸孝及びその父幸雄、その子幸成がそれらの著述の故に載せられてゐるものと思はれるが、かやうな名所圖會の編纂が果して國學といひうるものであらうか。私はこの父、子、孫三代にわたつて名所圖會を完成した美談を讃美

することに於いては人後におちないつもりであるが、これが果して國學であらうか。又深草の元政上人、涌蓮、辨玉といふ如き人、祇園の三才女といはれた梶子、百合子、町子の如きは果して國學者といふべきであらうか。又書道で名のあつた角倉素庵、倭漢三才圖會の著者寺島良安、韻鏡學者たる僧文雄、醫者で旅行者であつた橘南谿の如き人は果して國學者といふべき事をなしてゐるのであらうか。しかし、今はこの書の當否を問題としてゐるのではない。明治時代の國語國文、國史の大學者の間にも、かくの如く認められてゐたといふことを例として述べたのである。さうしてこれらの例によれば、たゞ日本國に行はれてゐることを文字でかけば、即ち國學であるといふことに認められたといふべきである。しかしながら、かくの如きものが果して國學であるであらうか。

明治時代に國學の衰へ、國學といふ名目の意味さへも分らなくなつたことは、國學者傳記集成といふ書一冊を以てしても明白に證明しうるのであるが、假りに、上にあげたやうにたゞ和歌をよんだとか、和文の著述があるとかいふやうなものを除いたらあとは國學者といひうるか否かといふに既にいふ如く荷田春滿の提唱以前には國學といふ名の學問も無いのであるから、その以前の人々、又その門流を汲まぬ人々は國學者といふことを嚴密にはあてられぬ筈である。たとへば、わが國の辭書の最初のものたる倭訓栞の著者、谷川士清の如きは神道に委しく、古典に於いて、國語に於いて、空前の業績をあげてゐる人で、その學ぶ所、行ふ所、志す所、著す所皆國學者として見て少しも不可な點が無い程である。しかしながら、この人は荷田春滿から系統を引く所の國學の範圍には、はひらない人で國學史の上からいへば、國學以前の人であるといはねばならぬ。それ故に、これらの人々は國學者たる實はあつても、名目上、國學者といふには躊躇せねばならぬ。しかし、かやうな人、即ち國學以前であつて國學者としての實を具へた人も多少ない譯ではないが、今はそれらを說く所でないから略する。

さてこの國學といふ學問が起らない前には、これに似たものを、何と唱へたかといふに、倭訓栞を見ると「國學は倭學也。神學あり、歌學あり」と說明してある。この倭學といふことはいつ頃からいはれたものであらうか。林家の忍岡家塾式に倭學科といふ名目がある。その式は寛文六年のものである。これをはじ

めとすることは出來ないが、この名目とても江戸幕府以前に起つたものでは無いであらう。然らば國學、倭學といふ實際は前に全くなかつたかといふにさやうな譯では無い。和學といふことについては、村田春海の和學大概といふ書に說いてあるが、それには四の時期をあげてあつて、弘仁承和の頃の日本紀の講說を第一期とし、第二期は大江匡房の頃であるとし、第三期は一條兼良の時とし、第四期は元祿以後の和學興隆であるとした。しかし、こゝの和學といふ名目は春海自身の設けたもので、昔からさう云つて來た譯ではない。春海は眞淵の門人で千蔭と相並んだ才人ではあつたが、所謂漢心を極端に排斥することを好まなかつたらしいから、恐らくは國學といふ名目を好まないで、和學といふ名目をふりまはしたのであらうが、和學といふのは日本の學といふ名目で、國學がわが國の學といふ解釋を下しうるものとすれば、大差ないかのやうにも見ゆる。今、こゝで國學の本義を論ずることは姑く見合せとするが、春海のいふ和學はこの廣義の日本の學の意であらう。さうすれば、それには日本國に存する事を研究するもの一切をさすともいひうるものであるからして、わが國の動植物、地理などを說くものも亦和學といひうることになるのは當然である。若しさうであるとせば、それは國學者傳記集成に載せた所と大差のないものであつて、何等特別の意味も精神もないもので、古道具屋の店にいろ〳〵のがらくたや、又貴重な美術品などが雜然として陳列してあるやうなもので、それらの陳列を總稱して、古道具屋の店といふと一般の事になるであらう。若し、學問的の古道具屋の店の如きものであるならば、世間から侮蔑せられることも或は尤もであるといはねばならぬ。しかし、國學といふものは果して古道具屋的の學問であらうか。

倭訓栞の國學即ち倭學の說明には「神學あり、歌學あり」とある。これはその國學即ち倭學のうちの分科として、神學と歌學とが在ると語つてゐるのであるが、問題は、この二つだけが主要なものであることを告げることは間違がない。その神學といふのは本邦固有の神道の學である。而してその歌學といふのはただ歌を學ぶといふだけでなく、國語國文の學までも含めてゐるものと見らるる。たとへば、契沖の假名遣の研究はもとより歌學の爲と本人が云つてゐる。しかも、その以前の定家假名遣が物語草子を正しく書かうとする爲に選定せら

れたもので、たゞ和歌だけのものではないのである。手爾波の學問ももとは歌學から出たものでそれが發展して近頃の國語學にまで開展したものであるから、廣義の歌學である。それ故に、倭訓栞のいふ所の神學あり、歌學ありといふことは上の如き意味を含んでゐるのであるからして、本居、平田の國學とその內容に於いて大差のないものと見られるのである。而して、谷川士清自身のなす所がまさしくそれを實證してゐるものである。

さらば國學は倭訓栞の說くやうに神道と和歌國語國文の學との二に分科は盡きてゐるかどうか。倭訓栞はその國學の說明になほ次の如くいひ加へてゐる。

虎關の國學者藝術也といへるは有職者流をさしていへるにや。道德に關らぬ如くおもへるはいぶかし。

これは國學は道德の學であることを一方に認めてゐるのである。而して虎關の說は元亨釋書十に增命の贊の中に

蓋帝者之於佛乘也。機餘之介事耳。其見微細者如彼。況大者乎。嗚呼梵學猶若彼。況國學乎。國學者藝術也。況廟堂乎。

とあるのをさすのである。虎關がこゝに「國學者藝術也」と云つた、その藝術といふ語は今日の人々がいふやうな意ではなくて六藝四術の義である。六藝はいふまでもなく、史記伯夷傳などにいふ所の六藝で禮、樂、書、詩、易、春秋の六經の學であり、四術は禮記王制にいふ所の詩、書、禮、樂の四道をいふのであるが、これらは支那でいふ所の國家統治の根本の道である。これを倭訓栞がたゞの藝術の如くにとつたからして、「道德に關らぬ如くおもへるはいぶかし」と云つたのであらうが、六藝四術には治國平天下の道を含んでゐるので、道德はもとよりその內にあるのである。この虎關の語は、虎關の創めて用ゐたものとは思はれないので、この意の國學といふ語が、虎關以前に既に存してゐたのであらうか、今それをつきとめる材料をもたぬから姑く虎關の語として論じよう。この虎關の語のさす國學はもとより、倭訓栞のいふ如く有職の學を主としたであらう。何となれば、六藝四術は元來支那傳來のもので、そのまゝでは國學といひ得ないものであるが、それが本邦の政治の道として取扱はれてある時に、國學といひうべきこと

となる。而して、それが治道に於いての法制、禮義の學となるのが自然である。然して、かやうに國學といふ語を用ゐたのは、後には正保四年版の延喜式の跋の中にも見る所である。私はこゝにいふ所の國學と倭訓栞にいふ所の倭學とが、すべて後にいふ所の國學の範圍に入るものと思ふものである。然らばそれらの學の總和が國學であるかといふに未だ遽かに然りといふことが出來ない。

我々の今日いふ所の國學といふものは荷田春滿によつて提唱せられ、その門流によつて繼承せられたものである。さうしてその說く所が國學の本質にふれてゐるものである。それ故に我々は先づその提唱者たる春滿の說く所を顧みねばならぬ。それについてはその創國學校啓を見るべきである。その說く所によると國學といふのは、

國家之學廢墜存十一於千百。
悲哉先儒之無識無一及皇國之學。
國學之不講實六百年矣。

といふ語を綜合して考へれば「國家之學」であり、「皇國之學」であつて、それを約言したのが「國學」であるのである。而して之の講ぜざること六百年といふ所を以て見ると、大體院政時代以後この學が講ぜられなくなつたといふ事になるのである。然らば、その以前に國學といふ名の學問があつたかといふに、我々は之を知らぬ。しかしながら、虎關がいふ所の(六)藝(四)術の國家の治道に關係ある學術は後三條天皇頃までは、在つたものと見たものであらう。それらは國學といふ名が無くても、國家之學、皇國之學といふ實質が在つたと春滿は見てゐたものであらう。さてその國學は何を目的としたものであらうかと見るに、

在我　神皇之敎陵夷一年甚於一年。

と嘆じてゐ、

自少無寢無食以排擊異端爲念、以學以思、不復興古道無止。

といふことを念としたのである。かくてその學は古道を復興するを第一の目的としたものであるから、一面それは、

復古之學誰云問

といふ所の「復古之學」である。隨つてこれをば、

古義不明則古學不復焉。

といふ如く「古學」とも云つた。これらによつて見れば、その明かにせうとしたのは「神皇之教」であり、之を道として見る時は「古道」であり、それを學として見る時は「古學」であるとなる譯であらう。

さらば、それらの古學を明かにし、古道を知らうとするには、如何なる手段によるべきかといへば、

古語不通則古義不明焉。

といひ

先王之風拂迹、前賢之意近荒、一由不講語學、是所以臣終身精力用盡古語也。

といふが如く、古語を正當に理解することを第一歩とするものである。かくして、春滿自身は最もこゝに力を注いだ。それ故に、彼自身

臣之至愚何之知。所不敢自讓者語釋也。

と云つてゐるのは決して自讃では無くして、眞に全力をこゝに注いだ事の實際を語るものであらう。この國學の目的と出發點とは上に述べた所で明かになつたであらう。それではこの神皇の教、古義古道を明かにするには如何なる事項を研究するのであるかといへば

格律之書俄滅、復古之學誰云問。

といひ

詠歌之道敗闕、大雅之風何能奮。今之談神道者、是皆陰陽五行家之說。

といひ、又

六國史明則豈翅官家化民之小補乎。三代格起則抑亦國祥悠久之大益哉。
萬葉集者國風純粹、學則無面牆之譏、古今集者語詠精選、不知則有無言之誡。

といふ所を見れば、

神道、法制、和歌、國史、

といふ如きものがすべてその研究對象であるといふことを見る。この一篇の上啓は即ち春滿の心血の結晶したもので、國學といふものゝ發祥する所である。この國學は上に述べた所で既に明かにわかるのであるが、要するに、古語の研究を基礎として古義を明かにし、依つて以て神皇の大道を明かにせうとする

ものである。而して、この目的と手段が、次々に繼承せられ、段々に明徴になつて、つひに明治維新の有力な原動力になつて働いたものであるが、今日に於いて果して、この精神の國學が活動してゐるのであらうか。

現代に於いてこの國學の歴史を觀じてゐる學者の說には「國學は今や眞淵や宣長に於ける如き潑剌たる古學の精神を失つて居る。維新の機運を將來に指導するものは到底國學である事が出來なくなつた。敎部省の廢止はこの意味に於いて國學の末路を語るものと見る事も出來る。固より日本研究は敎部省廢止の後と雖も一貫して繼續せられ、やがて今日に於ける隆盛を見るに至るのであるが、その性質に於いて、それはも早國學として呼ばれる事は出來ないであらう」竹岡勝也氏の國學史概說といふ如く見られてゐる。これは恐らくはこの著者だけの見解に止まらないので、似た樣な意見は多くの學者の胸中に懷かれてゐるのであらうと思ふ。若しこの意見が正しいとすれば、今日、國學などいふことをいふものは、はじめから時代後れの愚物であるといはれねばならぬのであらう。私は斷じてさうは思はない。若し、この國學が未來に必要が無くなつたといふことならば、それはその興起の目的が既に遂げられて、今後に必要が無くなつたといふか、若くは、その興起の目的が正鵠を失つてゐて、もはやさやうなものゝ價値を誰人も認めなくなつたといふことであらう。我々は國學は國家之學として必然的の要求に應じて起つたもので、一時の熱にうかされて生じたやうな薄弱なものとは認めない。それ故に、その必要が無くなつたといふ事は認めがたいのみならず、今日のやうに、國家に對しての自覺反省の缺乏した時代に際しては一層その必要であることを認める。この故に將來ます〳〵必要にもなり、盛んにならねばならぬものと思ふのである。竹岡氏の國學の興起に關しての觀察は、歴史上の事實の上からの觀察としては不當とはいはないがその源が實は日本民族の精神上已むにやまれぬ要求として勃興したその根本を論じては居ない。歴史も何もこの根本の精神の起す一の現象たるに止まるものである。その根本の精神の滅びない限り、それは一時壓迫せられてもいつかはもとにかへるものである。

この國學といふものは、わが大日本國特有の學問であつて、世界中どこをさが

しても類例の無い學問である。かく世界に類例が無いといふ點が、明治以後わが國學をして瀕死の狀態に陷れしめた最大の原因である。しかしながら、世界に類の無い爲にそれを侮り壓迫しなければならぬのであらうか。わが國の如く世界無比の國家に於ては、又世界無比の國學といふ學問の生じたのも偶然ではないのである。然るに、近頃またこの國學を西洋の文獻學に同じだと唱へて、之を文獻學といはうとするやうな說を生じた、私はまたこの點について少しく論じてみよう。

文獻學といふ語はフィロロギーといふ獨逸語の飜譯である。これは元來西洋諸國で希臘、羅馬の古代の文化をば、その時代の文獻、その時代の言語を基礎として研究することを目的とした學問である。かやうな學問の起つたのは歐羅巴の文化は近代の諸國といへども、皆希臘、羅馬の流を汲んでゐる爲に、その源を知らうといふわけで發達したものであるといはれる。さうして後には希臘、羅馬のみならず、英國とか佛國とか獨逸とかいふやうな、それ〴〵古代文化を有してゐる國々ではそれらの國々の古代文化を知る爲に、それ〴〵の文獻學といふものが起つたのであるが、それらの文獻學がちやうど、國學の行つてきた處に似てゐるから、國學は即ち文獻學であるといふやうな事を唱へることが起つて來た。然らば、われ〳〵は古臭い國學をすてゝ西洋の臭氣の高い文獻學にうつるべきであらうか。

西洋では近世の科學がだん〳〵盛になつて來て、法律、政治、歷史、言語、文藝、美術といふやうにそれ〴〵の專門學者があらはれ、それ〴〵の分科を深く研究することになれば、文獻學などいふものが無くてもすむといふ考へがだん〳〵生じて、文獻學などいふ學問が果して必要であるか、又そのやうな學問が果して成立ちゆくかと疑はれ出して來たさうだが、アウグスト、ベエクといふ文獻學者が出て、その文獻學は昔の人が意識して居つた事をその通りに再びわれ〳〵が認識することを目的とする學問であると說いてから、また、文獻學がその存在の價値を確認せられたといふのである。このベエクの文獻學と國學とが殆ど同樣であるといふことを世に公に說いたのが芳賀矢一博士(國學雜誌第十卷第一・第二)である。その說く所によれば、その目的も方法も全く同じ樣に說かれてある。

若しこの說の如くであれば、國學は文獻學といつてもよい事になる譯である。

抑も、明治維新以後、西洋崇拜の風が俗をなし、加之、いろ〳〵の西洋風の學科が流入して來て、國學の諸の分科を分割し去つて、國學といふものは全く無用の長物であり、舊來の陋習の見本の如くに考へられて來て、また顧みる人もなかつた時に、このべエクの文獻學が國學と同じ樣なもので、西洋にも既に一科の學問として存するといふことをいはれた時に、今まで國學を輕蔑したものも、西洋に在る以上は輕侮も出來ないものかもしらぬ位に考へたらしい。しかし、その當時はそれまでの事であつたが、その後、世の有樣がやう〳〵かはつてくるにつれて、この國學といふものについて多少の注意を加へることにもなつたらしい。そこで近頃の學者は多少これを考へることになつたとはいふものゝ、なるべく、國學といふ名目を避けて文獻學といふ語を用ゐることを努めて居る。この意識の底流にはやはり國學といふものを卑んで、文獻學といふ語を有難がつてゐる所の事大的西洋崇拜思想が横はつてゐると私は診察する。即ちこれらの人々は文獻學が外國に在るといふ事で、はじめてやう〳〵國學の存在を是認はしたものゝ、まだ〳〵西洋人に晛まれるのが畏いので、それを日本の文獻學といはうとするのであらうか。若しさうであるとすれば、學問の祖先に對して親不孝な人間どもである。

上の如くにべエク一流の文獻學が、國學と殆ど同じであるといふことは芳賀矢一博士が說き、その他の學者も略同じやうに認めてゐるらしいが、果してさうであらうか。先づ文獻學といふ名目を考へてみると、これは何を目的としてゐるのであるかは名目だけでは分らぬ。古語を研究の基礎として、古い文獻を研究するといふことが最終の目的であるならば、わが國學と全然同一であるとはいはれない。國學は古語古代の文獻を研究することは文獻學に同じいとしても、目的は古語や文獻にあるのではなくしてわが國の道を知らうとする所にある。それ故に文獻の研究は手段であつて、目的ではない。凡そ學問に名づけるに、その研究の手段を以て名づけることが妥當なのであるか、その研究の目的を以て名づけることが妥當なのであるかといふことを一般的に考へてみるがよい。尤も、文獻學といふ名目に似た名をもつてゐる學問に解剖學といふものも

無いでは無い。これは解剖學とはいふものゝ解剖その事を目的とするものでなくて、解剖を手段として、人體の構造を研究する學問である。かやうな例もあるからして、文獻學といふ名目は全然いけないとはいはれないが、目的を明かにせず、手段を以て名づけたもので、何等適切な名目ではない。國學といふ語は明白に目的を明かに示してゐるもので、しかも、これが、古くから活潑に研究せられて來てゐるのであつて、文獻學といふやうな曖昧な名目にまさること萬々である。何を苦んで今更、この歴史ある名目をすてこの明確なる意味あるものをすてゝ、彼れの曖昧な、さうして、われ〳〵に何に親しみのないものを頂戴するのであらうか。私はその心を怪むのである。

文獻學の名は手段に卽して名づけたものである。それ故にこれが不十分なことはいふまでもない。それでこの學問は古學或は古學ともいはれたものである。この方が、その目的と性質とを明かにした點で、文獻學といふよりはまさつてゐる。而して、この古學といふ名目は本邦に於いても荷田春滿が既に唱へ、又一般に國學者もその學を古學と認めたからして、この點に於いてベェクの所謂文獻學と性質を全然同じくするものであるかの如くにも見ゆる。しかしそれは果して間違の無い事であらうか。わが國學はたゞ古代の事を知るといふのが目的ではないのである。その古代の事を知るといふのもまた一の手段であつて「神皇之敎」を知り、古道を復興せうとするのが目的であつた。それ故に、この國學の目的の古道復興といふことが、天皇親政の政體の復興を導いて明治維新を誘發したのである。こゝに我々の國學といふものが、たゞ古代の事を知らうとするだけの目的で無い事が知られるのである。さうして、われ〳〵は西洋の文獻學がかくまで活力に富んでゐるものとは知らないのみならず、古道を復興せうといふやうな目的があるかどうかを知らない。なほ又それだけでなく、わが國學の古道を復興せうとした、その目的は「神皇之敎」の中頃衰へたのを復活せうとしたのである。而して、これがたゞ古の姿にかへらうとしたのではなくして、古今を貫いて存する神皇の道を知らうといふのが目的であつた。それゆゑに、古道を明かにすると共に新たな時代を指導する燈明臺にもなつたのである。まことに、この學は谷川士清が考へたやうに、道德を知らうとする一の點

があり、又本居宣長のいふやうに道を明かにするのが主眼である。この道は過去の史跡を正しくたどることと、現在の姿を正しく理解することとによつて明らめられ、而して將來の理想を照す照明ともなるものである。しかし、西洋の文獻學が果してこれだけの根本思想をもつてゐるのであらうか。

私はベエクなどの根本思想といふものを知らないから、今それを論ずることが出來ないが、わが國學は上述の如くに一の大なる信念が底に横はつてゐる。このやうな信念がこの國學を興したものである。手段方法が似たからと云つて、わが國學は文獻學に同じいとはいはれない。國學といふ語には「神皇之教」を明かにせうとする「皇國之學」といふ精神が十分にあらはれてゐる。文獻學が假りに國學にその目的、方法が全然一致したやうに見えても、その文獻學といふ語と國學といふ語との意味の違は言語と國語といふやうな違があるのである。國學が文獻學に似てゐるとしても、それはたゞの文献學ではなくして「わが國の文獻學」である。國學を文獻學であるといふことは、その手段とか性質とかの說明としては役には立たうが、それにはわが國といふ嚴密な制限がある筈である。然るにその制限を示す所の「わが國」が世界無比の國體を有してゐるものであつて、西洋諸國のこれまで夢想もなし得なかつたやうな崇高な事實が多々このわが國には存するのである。それらの特異な事實の眞相なり、道理なり、精神なりを明確にすることが國學の特色となるべきものである。それ故に國學は又わが　大御國の世界に比類なく貴い所以を研究する學問であるともいはれるのである。隨つて國學はやはりどこまでも國學であつて、たゞの文獻學ではない。國學の眞髓は、私が「大日本國體概論」の劈頭に、

國體の宣明は國學の第一要義なり。

と叫んだやうに、この國體の事實なり、道理なり、精神なりを明かにするにあることとは斷じて疑ふべき事で無い。かやうな精神が、かれら西洋人の說く文獻學といふものに存するであらうか。私はこれを知らぬ。國學の第一要義がこの國體の宣明に在つたからこそ、明治維新の原動の中の主要なものとこの國學がなり得たのである。たゞ古代の文化にあこがるゝといふことが、その本旨ではない。神皇之道がわが國の根基である。この神皇之道が明かになれば、人心も振

起するのが當然であるではないか。かやうに考へてくれば國學が文獻學に成りさがることは、この精神を失つて形骸だけを止めることになる譯であつて、それは同時にわが國體が特異であるといふ意識を棄てることにもなるのである。又國學が將來に永續せぬといふ考は、わが國家の特異性を研究する必要がなくなるといふことで、言ひ換へれば、わが國家が將來に永續せぬといふことになる原因をつくるやうなものである。こゝに於いて私はわれ〳〵が考へてゐる所の國學の目的と手段とを簡單ながら說かねばならぬと考へる。

國學の目的はわが大日本國を正當に理解するにある。この大日本國を正當に理解するといふことは、先づ國家組織の要素から考へると

國土、國民、
天皇

の三に分けて觀察し、更に之を一括して

國家、國體

として見なければならぬ。そこでそれらの觀察の方面の差によつてそれ〳〵の學科が必要となるのである。しかし、いづれについても、わが國家といふ意識を忘れては決して國學とはいはれない。しかしてこの國家といふものは國民の精神なり文化なりの現象であるからして、この點にその研究の主要點をおかねばならぬものである。しかも、それらを根本的に理解せうとするには、その精神を傳へ、文化を傳へてゐる所の文獻なり、言語なりを正當に理解せねばならぬ。さうしてその文獻がまた、言語文字を第一の條件とするものであるからして、國語を正當に理解することが、この學問の研究の基礎になるのである。この事は荷田春滿が既に極言してゐるのであつて、次々の國學者が皆これに力をこめて來た。かくしてわれ〳〵はわが文化のあらゆる事象について正當な認識をもたねばならぬ。これについては現在の事象と共に、深く史的經過を洞察せねばならぬ。こゝに於いて國史の正當な認識が著しい重要性を帶びて來る。國學は上述の如き目的を有するが爲にその行ふ所は多端である。即ちわが國のあらゆる文化に亘つてその正當な認識を要求するものである。かくの如く考へてくると、國學は果して古學であるか否かといふ問題を生じてくる。こゝ

に上にあげた倭學といふ名目を考へてくると、これは古の事のみを研究するものといふ事が出來ない。神道の學も、古の神道だけを研究する學問といはれない。歌學も亦古の歌や文章や語だけを研究する學問といはれない。更に虎關の國學者藝術也といつた國學は國家の法制「禮儀を云つたもので、古の事だけを研究するものとはいはれない。然らば荷田春滿の古學といふのは如何なる意味であらうか。それとこれとは矛盾するのではなからうか。こゝに私はも一度かの創國學校啓を顧みる必要を見る。春滿のいふ所の古學は實は「復古之學」の意であつた。復古を目的とした學であつた。何が故に「復古」と云つたかと考ふるに、彼はわが「神皇之教」が陵夷すること茲に六百年、その天皇親政、敬神崇祖の大道の衰へを復興せうといふ事にあつた。即ちわが國家の本來の面目を復活せしめようといふ事にあつた。即ち古義古道を知らうとするのもこれ亦一の手段であつて、その目的は「神皇之教」を明かにする所にあつた。その神皇の教は皇國の古今を通じて存する道で、千古不磨の大道である。これが古道である。それ故に復古といふことは一時的の事で、當時これが、第一の急務であつたから

これを強調したのであつた。國學の眞の目的は復古にあるのでなくて「神皇之教」を明かにするにあるのである。かやうに考へてくると、明治維新で國學の目的を達したといふは、その復古だけの事を云つたのであるといふ事がわかるであらう。國學が今後不用であるといふことは、今後「神皇之教」即ち國家の精神が不用であるといふに歸着するのである。然るに、わが「神皇之教」といふものはわが國民道德、わが國體の源をさすのであるから、これが今後不用であるなどとは夢にも思はれぬ譯である。こゝに於いて國學は古代に憧るゝのが目的でなくして、現代を如何に指導するかといふ事をもその目的の一部に有してゐるものである。明治維新の原動力となつたのは明らかにその時代の指導をなしたのである。荷田春滿の云ふ所の格律の學といふものは、明治維新までの朝廷の現行法制であつたので、今日いふ如き古代法制ではなかつた。かやうに考へてみると、今日國學者といふものが、たゞ古代のことだけを說いて現代に對して何等の指導をもなし得ないのは、國學の本旨を忘れてゐるのであるといはねばならぬ。國學の本旨は古事記の序にいふ如く「古を稽へて今を照す」といふ所に

あるのである。これを忘れはてゝ古を照すことをせなかつた國學が、時代から置去りにせられたのはやはり當然であつたといはねばならぬ。

かやうに論ずると、然らば、古代の事など論ずる必要が無いのでないかといふ反對說も出て來るかも知れぬ。しかしこれは一を知つて二を知らぬ論である。われ〳〵の今日あるは、たゞ今日だけの問題ではない。祖先代々のあらゆる文化の集積の結果である。今を照すには必ず古を稽へねばならぬことは人事萬般みな然りである。文獻も口碑も一切無いなら致し方もないが、苟も、その由來の知らるゝ以上、よくその由來と、その道理と、その精神とを知らなければ、あらゆる社會萬般の文化、人事の本意を知りうべきものでない。その本意を知らねば、之を正しく認識し、正しく處置し得べきものでない。こゝに於いて、古代の事を委しく知るといふことが、深い〳〵必要性をもつてくることがわかる。かやうな精神からしてわれ〳〵は古代の文獻即ち古典といふものを最も重いものとして尊重するのであり、これを正當に認識せうとするのであつて、國學の研究上の主力をこの古代の文獻に注ぐ理由もこゝにある、今、こゝに古典とは何ぞやといふことを述べてゐる餘裕もないから次の機會に讓るが、この古典に於いて最もよくわが國家民族の恒常的精神があらはれてゐるから、これの研究が、國學の學問的研究の中心となるのである。

國學は國家の組織の要素の研究に先づ着眼せねばならぬことは既に述べたが、こゝにそれらについて、なほ少しく述べてみよう。先づ此點では天皇皇室についての正當なる認識を有せねばならぬ。これについては一面わが國家組織についての正當なる認識を必要とし、又一面皇室に關しての正當な認識を必要とする。その國家組織についての正當なる認識の爲には、國學はわが帝國憲法について、その由來、その道理までも深い洞察を加へねばならず、皇室に對しての正當なる認識も、皇室典範を主として、其他典禮制度に至る迄もその由來道理について深い洞察を加へねばならぬ。かくて又國民の生活の上に目を移せば、その國民の性情、國民的文化等について研究すべき方面は多端である。斯の如くにして國學はわが國のあらゆる文化に亙つて正當な認識と洞察とを要求するものである。かくその研究すべき方面が多端であるが、しかし、その眼目はたゞ

一の國體の宣明に歸するものである。この國體といふものは天皇、國民、國土が一體となつてゐる所の實體である。而して國體を維持して永遠に生命あらしめるものは、所謂古今を貫く一の道である。この道が、神道といふ形をとり、國民精神といふ形をとり國民道德といふ形とり、國體といふ形をとつて現はるゝものである。古來の國學者の心身をなげうつて、研究してきたのは、結局この一の道を明かにする爲であつた。

さて、國學は上のやうな目的を有するが故に、その研究の手段としては萬般にわたつて知らねばならぬといふやうな姿である。一の語を明かにするのも、一の藝術をしらべるのも、一の古物を鑑賞するのも、皆この目的の一部としてはたらくものであるから、それを忘れてはならず、又それを小局部に限られたものとして自ら輕んずべきでない。國學はかやうに種々の分科を有しうるであらうが、しかし、それらの分科はどこまでも分科そのものであつて、國學それ自身ではない。それはたとへば手足は吾人の身體の缺くべからぬ部分であるが、吾人それ自體ではないと同樣である。國學はそれらの分科を必要とし、それらの分科を有するによつて目的を達するものであるけれど、それらの總和が直ちに國學そのものではない。その横に各の分科を貫き、縱に古今を貫いて通つてゐる所の一の道、一の精神を明かにせうとするのがわが國學の精神であり、目的である。國學とその分科との關係は諸の科學と哲學との關係に比べて考へることが出來る。諸の科學に對してその原理の統一としての哲學が存する如く、わが國家、わが民族、わが文化の分科的學術的研究に對してその原理の統一としての研究たる國學といふものが存するものである。而して、その研究の結果が過去に於いて明治維新といふ一大事實を誘導した。將來に於いてわが國家を興隆に導く指導原理も亦國學にまたねばならぬものであらうと信ずる。

以上論ずる所を以て略私のいはうとした點を述べたのであるが、讀者は私のいふ所を以て著しく主觀に傾いたもので、學問といふに躊躇せねばならぬものでないかといふ懸念を生ずるかも知れぬ。しかし、私は少しもさやうな懸念もなく、又あらかじめ、答を豫想するやうな研究をする必要も感じない。我々は正當に、あるがまゝに、わが國語、わが國史、わが國家、わが民族の行動、わが文化等を觀

察すべきである。その時に正邪善惡はあるがまゝに吾々の心にうつるのである。わが國が神皇の大道の顯現である以上、必ず合理的正直であつて一毫もごまかしをゆるさぬであらう。われ〳〵の國學の研究が一毫も爲にする所があつて良心を曲げるやうな態度をとつたならば、正直を本旨とする神皇の大道はかへつて、これが爲にゆがめられるといふことになるであらう。それ故に私は研究の態度としてはあるがまゝに、すなほな心で施すべきもので、よき事はよいとし、あしき事はあしいとしてすゝまねばならぬものと確信する。

要するに、國學はその研究の基礎を國語と古典とにおいて、國史を通じて古代より今日までの文化を通じて見、以て、わが國家の特性本質を明かにし、わが國民精神をさとり、更に古今を通じて存する一貫の道を明かにするを目的とする。それ故にこれは、その手段としては之を知るといふ事にはじまるのであるが、それはたゞの知識に止まらず、わが國家の魂に直接に觸れようとすることを目的とするものである。さうして、この魂にふれ、それをつかんだものは、まさに國民の先頭に立ち、國家の針路を指導する大任を帶びなければならぬものであらう。

この雜誌の委員諸士の庶幾ふ所はまさしくそこにあるのであらうと私は信ずる。

（忽卒の際に起稿したので漏した事が少くない。他日之を補ふことを約して、こゝに筆をさしおく。昭和九年十一月三日

# 四、國學の眞髓

これは昭和十一年六月發行の雜誌「歷史教育」に載せたるものなり。その說く所、前の所載と稍重複せるものあるが如くなれど、彼は大體を說くを目的とし、これは精神を說くを主としたれば、彼是相補ひて、著者の微意を徵しうべきものあらむ。

本誌から上の如き課題を受けたが、私自身國學の眞髓などいひうる資格をもたない。ただ國學の本旨がどこにあるかといふことについての意見を以て之に代へようとする。

さてこの問題について、先づ第一に明かにすべきことは、國學といふ語の意義である。わが國で國學といふ語の用ゐられたもので最も古いのは大寶令にい

ふ所の國學である。これは京都に設けられた大學に對して地方の國々に設けられた官立の學校のことである。これは國司の管理に屬して郡司の子弟等を教育した所である。今我々のいはうとする所の國學はこの學校のことではなくして學問としての國學である。學問としての國學といふ語がいつから起つたかといふことは私は知らぬ。私の知つてゐるものでは虎關師錬の著した元亨釋書の增命の贊のうちにいふ所のものであるが、その文は次の如きものである。

予早逸遊從事於竺墳。以故瞽之國史矣。偶因修僧史少見皇家之治迹焉。而李唐之代懿趙宋之眞仁之所不逮也。至仁壽聖皇差名大夫鑑選吾徒之稚雛者、永平以來、未聞是等盛擧焉。蓋帝者之於佛乘也機餘之介事耳。其見微細者如彼。況大者乎。嗚呼梵學猶若彼。況國學乎。國學者藝術也。況廟堂乎。（下略）

こゝにいふ國學とは如何なる意味であらうかそれが藝術であるといふ、その藝術といふのは今日いふ所の藝術で無いことはいふまでも無い。谷川士清の倭訓栞に曰はく、

國學は倭學也。神學あり、歌學あり、虎關の國學者藝術也といへるは有職者流を指ていへるにや。道德に關らぬ如くおもへるはいぶかし。

と。こゝに「藝術也」といつたのは果して谷川のいふ如く有職故實をさすのであらうか。同じ倭訓栞の「げいじゆつ」の下の說明を見ると、

藝術也。後漢書の注に藝謂書數射御術謂醫方卜筮也。

とある。谷川のいふ所は恐らくはこの意での藝術なのであらう。然らば果してこれが妥當なことであらうか。この語は後漢書安帝の永初四年の詔にあるのである。さて晉書には列傳の一として藝術傳といふのがある。それに傳した人々は天文、歷算、卜筮、陰陽、占候をよくした人々である。しかしながら、かの虎關のいふ所はこの意の藝術とは思はれぬ。彼のいふ所の國學なるものは天皇の治道を翼け奉るべき學問であることは明かである。わが國に於いては儒學を以て帝王の學とせられたことはあるけれども、天文卜筮曆數の學を以て帝王の學とせられた事を見ない。藝といふ語は古學問技能をさしたもので、周禮大

司徒に「六藝禮樂射御書數」とある、その藝の意であらう。術といふ語は、儒術をさしたものである。史記の儒林傳に「及至秦之秀世焚詩書阬術士六藝從此缺焉」とする術士は即ち儒者をさすのである。而して儒士の學ぶべき學に四術といふのがある。禮記の王制に「樂正崇四術立四教順先王詩書禮樂以造士」とある如く、詩書禮樂の四學が四術である。この六藝四術を約めて藝術と云つたものと思ふ。即ちその「國學者藝術也」と云つた精神は藝術即ち儒士の學で、經學を中心とした治國平天下の學の意であつたであらうと思ふ。さうすると、虎關のいふ所の國學といふものは國家といふ意識と道德とが骨髓をなしてゐた學問であらうと思はれる。谷川が「道德に關らぬ如くおもへる」と云つたのは誤解であらう。

虎關の示した國學といふ語は頗る注目すべきものであるけれど、この國學は後世に直接に系統を垂れなかつた。これは吉野朝時代の戰亂で學問が正しく傳へられなかつた爲であつたらう。近世になつて國學といふ語が如何樣に用ゐられたかといふに、元祿頃に編せられた佐賀藩の葉隱卽ち鍋島論語と稱へらるるものに「御家來としては國學心掛くべきなり」とか「御被官ならば餘所の學問無用に候、國學得心の上にては餘の道も慰みに承る可き事に候。よくよく了簡仕り候へば、國學にて不足の事、一事も無之候」とかいろ〳〵云つてゐる。その趣旨本意は後に起る國學と精神が相通ずるものであるけれど、その國といふのはその藩國をさしたもので、大日本國の意義ではないから、眞の國學の意にはまだなつてゐない。大日本國の學の意での國學といふ語は倭訓栞に見ゆることは上にあげた。この著者谷川士清は垂加流の神道を學んだ人である。その谷川より先に同じく垂加流の神道學者たる吉見幸和の說を藤塚知直が寬保三年に記した神學初會記に學規の大綱といふのが載せてある。それは三條であつて、第一には「神道」といひ第二には「國史」といひ、第三には、

國學の儀は誰によらず學ぶべしといへども云々

と云つてゐる。又その五十鈴川記には、

神學は國學なり。其國に居て其道を學ずんば有べからず。

とも云つてゐる。これによると神道の學即ち國學で、神道と國史とがその研究

すべき科目である。谷川の說はこれと稍違つて國學即ち倭學で、そのうちに神學と歌學とあるといふことになる。

こゝに倭學といふ語があらはれたが、この語はいつ頃からいはれたものであらうか。村田春海は「大江の匡房の和學得業生問答といへるものあるを見れば」堀川院の御時頃から和學といふ名目があつたと云つたが、これは續本朝文粹や朝野群載にある和歌對策といふ擬作の文に和歌得業生といふ名目を用ゐてあるのを誤り傳へたもので、全然問題にならぬ。現在、私の知る範圍では林春齋が寛文六年に定めた、忍岡家塾式の五科を立てた中の一科に倭學科といふ目を設けたのを古いものとする。これをはじめとすることも出來まいとは思ふが、この名目は江戸幕府以前に在つたかどうかは問題である。しかし、名目は未だ起らなかつたとしても、たとへば朝野群載卷九に載する賀茂保憲が「辭爵讓親父」を請ふ狀に「親父忠行心尋古今學兼倭唐」と云つてゐる如く又元亨釋書にもいふ如く國學若くは和學といはるべき事實の或るものは古くから在つたであらう。村田春海の和學大概に說く所によると、弘仁承和の頃の日本紀の講說を和學の第一期とし、第二期は大江匡房の頃とし、第三期は一條兼良の時とし、第四期は元祿以後であるとした。この春海の考へてゐた和學とは如何なるものであつたかといふに、「第一に國史實錄の學を一科とす。」「次に律令典故の學を一科とす。」「次に古言を解釋するの學を一科とす」と云つてゐる。その三科といふのは何かといふものが加はつてゐない。その後著しいのでは塙保己一の和學講談所の名目とした和學である。こゝで教授した科目は如何なるものであつたか今詳にし得ないが、しかし、その講談所で活躍した人々、又そこで出版した書籍などを見ると、春海の所謂第一科と第二科とを主としたものであつたと思はるゝ。以上國學といひ、和學といつたものは略似たものゝやうでそれらを綜合して考ふる時にはそれらには神道、國史、法令、典故、和歌、古言といふやうに科目を立てゝ考へらるべき點であると思はるゝ。かくの如くにして、この學の範圍も分科も亦略きまつてゐるやうである。然らば以上述べた所を綜合してこれを國學と總稱したものであらうかといふに未だ遽かに然りと答ふる譯には行かぬ。

以上は國學といふ語の用ゐられて來た場合をいろ〳〵の方面に見たのであるが、われ〳〵がいふ所の國學の眞髓には未だ觸れてゐるとはいはれない。われ〳〵が國學といひ、國學者といふのはおのづから嚴密な意義と範圍と精神とをもつてゐるものである。この嚴密な精神での國學といふものは實に荷田春滿によりて基礎が確立せられたものである。その事はこの人の創學校啓に見れば明かである。この啓文は板本も二、三種あるが、その草稿が京都の羽倉家に保存せられてあつて、荷田全集の卷頭に載せられてある。この啓文を藤岡作太郎氏は平田篤胤一派の僞作だらうと云つたさうだけれども、それは草稿の存することも知らず、版本の春葉集に載つてゐることも知らないで漫に放言したものである。この啓文の載つた春葉集が公刊せられたのは寛政十年であつて、その頃は平田篤胤は市川團十郎の居候か、常盤橋邊で飯焚かをしてゐたので、未だ本居の門にも入つてゐなかつたのである。この啓文は草稿と刊本にあるのと文句に多少の相違はあるが本旨はかはらない。この春滿の啓文といふものが近世の國民的大活動の一たる國學の精神的淵源であり、指導原理であつて、國學の眞髓は一にこゝに存するのである。その中に、

在我　神皇之教陵夷一年甚於一年。國家之學衰墜存十一於千百。格律之書、氓滅復古之學誰云問。詠歌之道、敗闕大雅之風何能奮。今之談神道者是皆陰陽五行家之說。世之講詠歌者大率圓鈍四教儀之解。

といひ

國學之不講實六百年矣。

と嘆き、更に又、

悲哉先儒之無識無一及皇國之學。痛哉後學之鹵莽誰能歎古道之潰。

と云つてゐる。この言によつて見れば、その主張する所の學は「國家之學」であり「皇國之學」であつて「國學」といふのはそれらを約めて云つたものであらう。而してその國學の講ぜられざること六百年といふ所を以て見ると、大體、院政時代頃からこの學が講ぜられずして、當時に及んだものと思つたに相違ない。然らばその以前にさういふ意味での國學といふ名の學問が在つたかといふに、我々は之を知らない。しかしながら虎關が云つた所の(六藝四)術の國家の治道に關係

する學術は後三條天皇の頃まで在つたものと見たであらうと想像せらるゝ。それら治國平天下の學はたとひ、國學といふ名が無くとも、國家之學、皇國之學といふべき實質が在つたと春滿は見たものであらう。この考へ方は、國學の由來及び本質を考へる上には實に重大なる鍵である。さてその國學は何を目的としたかと考へると、既に上にあげたやうにそれは「神皇之敎」の陵夷を嘆いて、これが復興をはかるに在つたのである。即ち彼はその素志を述べて、

臣自少無寢無食以排擊異端爲念。以學以思不復興古道無止。

といふが如くに神皇の敎即ち古道を復興せんとすることが本旨であるが、それは專ら國學によらねばならぬとした。そこで、その國學なるものは即ち彼が云ふ所の「復古之學」であり、隨つて國學が又古學ともいはるゝのである。かくてそれを道として見れば、古道であり、學として見れば古學であるといふことになる。それ故に純正の國學をなす學徒が、古學といひ古道といふ名目でその學その道を呼ぶのはその源がこゝに在るのである。

こゝに國學が復古之學であり、古學であると云つたが、それは古代を漫りに謳歌して、一も二もなく古の姿にかへさうとするのであらうか。これはその復古之學の名目によつてさやうに誤解せられ易い。しかしながら春滿のいふ所は神皇之敎が六百年間もすてゝかへりみられなかつたことを遺憾としてそれを復興せうとしたのであつて、たゞに古を尙ぶといふのが本旨ではなかつたといふことはその啓文によつて明かである。即ち、この古道古義なるものは、支那人の云ふ所の道の經であつて古今を貫いて存すべきものであるからして、その古の道、古の義を今の世に明かにせうといふのが本旨であつたのである。かくしてその學が賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の諸大人により繼承せられ、その學としては益々開展して、明治維新の指導原理ともなつた、さうして、これらの學者はそれ〴〵その主とする點に差違はあるけれども、春滿の指南に基づいて、着々實現して來たことはそれら各大人の業績によつて明かである。かくしてこれら三大人はその學問を步一步明かに深くしたと共に所謂道なるものも步一步高められた。それは眞淵に於いては國意考を中心とした思想となり、本居宣長に於いては直毘靈を中心とした思想となり、平田篤胤に到りては所謂復古神道とい

ふ名で呼ばるゝ道を一往完成した如き狀態にまで導いたのである。しかし、その復古神道と云つても、それはたゞの復古ではなくして、一面から見れば神道そのものゝ展開であつたのである。

なほこの國學が如何なる學問であるかを知らうとするには、この國學の發生した歷史上の原因に徵することも一の捷徑である。この學の歷史をばたゞの斷片的の日本紀の講述とか、和歌の學とか、法制の研究とか、故實の研究とか神道の、研究とかに求め、それらが集注して近世の國學となつたといふ見方は最も幼稚な臚列的な器械的な見方で國學の本質を全然知らない人の言といはねばならぬ。その他の學者では或は當時漢學者の間に古文辭學が盛んになつたにつれて生じたものであるといひ、又一般的に起つた復古主義につれて起つたものであるといひ、又當時の時勢に應じて地下の間から一種の革新的の思想運動として起つたものだとか種々に考へられ、論じられてゐる。私はそれらの說を否認はしないが、それらがこの國學の勃興すべき主たる原因とは考へてゐない。それらは佛敎的の語でいへば、皆緣であつて因では無い筈である。國學の勃興については、わが國家の歷史を大觀すれば、直ちに何人にも知らるゝことで、この學は實に起らざるを得ずして起つた必然性があつて、これは偶然の事項では無い。この事については村田春海の和學大槪の言を味つて見るがよい。

我國の儒生はかならず我國の國史典故に通ぜずして叶はざる事なるを、當世は學問の道草莽にのみあれば、儒者皆曲藝の士の如くなりて、儒者の任はたゞ漢土の書にのみ通ずるをおのれが業とのみ心得、我國の事は其業の外の事のやうにおもひたるは學問の本意を失へるもの也。

と云つてゐる。春海は更に林春齋がその家塾に倭學科を立てたことを賛して次の如くいふ。

林春齋が諸生を敎る五科のうちに和學科をたてけるはこゝろある事なり。すべて儒生の業は經世治國の術なれば我國にありては古へよりの建國の大體ト制度の沿革、人情世態の變遷し來れる有さま萬の事をよくしらではいかでその學問の道をほどこすべきやうあらん。されば和學をば、かならず要務となすべきなり。

と。この春海の言は實にわが國古來の教學の本旨を說いたものである。從來、國學の勃興を論じた人々はこの重大なる事實を知らないのではなからうか。元來わが國家が、儒學を採用せられたのはわが國の神皇の道の羽翼たらしめむが爲であつたことは神皇正統記の說を待たなくても明かな事である。それ故に天智天皇の御世から起つた大學國學に於いて支那の學問を主として御採用になつたけれども、その精神は虎關の所謂藝術であつて、治國の大經とするにあつた。さうして、左樣な意味での儒學は鎌倉時代から段々衰へて、支那中心の學問にうつりつゝあつたけれども、それでも、德川幕府の初頃まではまだ儒者といふものゝ本質は保たれてゐた。それ故に幕府の聘に應じた林道春なども後世いふ漢學者とは選を異にしてゐた。その事は佐藤誠實の日本教育史にこの人の事を說いて「即位、改元、行幸、入朝の禮、及祭祀の典、外交の事を初めとして、總て國家の制度、漢家の故事に就て每に顧問を受けしに、其學和漢を貫穿して識らざる所なかりしかば、爲に著述する所多し、是れ當時儒者を用ゐし狀を見るに足れり」と云つてゐるのでもわかる通り、道春にしても、その子春齋にしても、それらの學はただの漢學では無く、わが國の史實、法制、典故に即した學だつたことは明白で、これらの人々の著述もその通りであつた。即ちその頃は儒者は漢文漢籍を主とはしたが、それは手段であつて、その目的はわが國家の學であつたことは明白である。然るに、それらの儒學漢學が、もと本邦治國の要道として採用せられた本旨を忘れて、支那本位の經學史學詩文を研究するを本旨としてわが國の事をすて、わが國を輕蔑するやうな風を段々に盛んにして來た。それも一時にさうなつたのではあるまいが、木下順庵の門人などに既にこの傾向が著しくなつてゐる點があり、荻生徂徠などの時代になつて、こゝに本邦の學と殆ど絕緣した形になつてしまつた。それらの事實は儒學漢學の歷史を見るまでも無く、それらの學者の著述目錄を一瞥してもわかることである。かやうになつて來ると、古の聖天子が儒學を御採用になつた本旨が全く沒却せられてしまふ事になるのみならず、國家の學といふものがわが國に於いては上下いづれにも全然無くなつた有樣であるといふことになる。この大局觀に立つわが國の教學の歷史上の狀勢が國學を勃興せしめた要因であり、この大なる日本精神が冥々裡にこの

國學勃興といふ大活動を起さしめた根柢である。かくの如くにして、この一大事實が荷田春滿の心にはたらいて活動を起さしめたのが國學である。而してこの春滿の主張した學が如何にも國家之學といふにふさはしいものであつたといふことが出來るものであり、同時に虎關のいふ所の國學と精神に於いて一脈の生氣相通ずるものが存するのである。而してその春滿をして、

先儒之無識無一及二皇國之學一

と痛歎せしめたその事も事實であり、又「國學之不講實六百年」と云つた意味もわかるのである。今この意味を以ていへば、平安朝以前の儒學は同時に國學であつたといはねばならぬのである。それは形に於いては今の國學とは違つてゐたとはいへ、精神に於いては明かに同じものであつた。然らば、荷田春滿の唱へた國學と虎關のいふ所の國學と全然同一に見てよいかといふに、その精神は同じであつてもその學としての科目、研究法の上に於いては、全然ちがふといふ程に異なつたものであるから同じといふことはもとより出來ない。春滿の時代に於いては既にわが新しい國學を生ずべき部分的の研究は到る所に新しい姿で起つてゐた。春滿はこの新しい研究の手段をとつてそれを着物として、こゝに新時代に適當すべき新しい學としての形をとつた國學を復活せしめたのである。然らば新に興つた國學は如何なる姿を呈したか。

春滿がその主張する如く古學を明かにし、古道を知らうとするには如何なる手段によつたかといふに、彼は、

古語不通則古義不明焉。　古義不明則古學不復焉。

といひ、又

先王之風拂迹前賢意近荒、一由不講語學。　是所以臣終身精力用盡古語也。

といつた如く、古語を正當に理解することを第一歩とするものであるとして、春滿自身は、

臣之至愚何之知所不敢自讓者語釋也

と云つてゐる。これは決して漫然たる自讃では無くして眞に全力をこゝに注いだ事の實際を語るものであつた。即ち語釋を基礎として、古義を明かにせうといふのである。これでその國學の目的と出發點とは明かになつた譯である

が、それではその、神皇の教、古道、古義を明かにするにはその出發點よりして進んで、如何なる事項を研究するのであるかといふに、

神道、法制、國史、和歌、古語、

といふ如きものがすべてその研究對象であることを見る。卽ち彼の一篇の上啓は春滿の心血の結晶したもので、我々がいふ所の純正なる國學の發祥する所であり、同時に國學の眞髓のやどる所である。

以上述べた所で國學の眞髓がどこにあるかといふことがわかるであらうが、之を村田春海のいふ所の和學に照して見ると一層歴然たるものがある。春海のいふ和學の三科なるものは春滿のいふ所の國學の範圍に入つてその外には出ないのである。しかしながら、春海のいふ所は三の分科があるだけで、その統一點がどこにも示されてゐない。春滿のいふ所は神皇の教として古來傳へられた道が、研究の目ざす極致である。しかし、それはどこまでも學であるから研究の方法科目が考へられねばならぬ。こゝに於いて春滿はその研究の出發點を言語におき、その研究部門は、目的なる古道古義を明かにする爲に必要なる方面として見たもので、實はそれら各部門について、種々に研究せられた上で、その本體たるものが明らかにせられねばならぬとした。その本體を最後の目的としたその目的が神皇之教、卽ち古道であるのであるが、春海の和學にはこれを忘れてゐる。これわれ〳〵が春海を以て正系の國學者と認めない原由である。

而して春滿以前の學風を汲む學者、たとへば谷川士清の如き人はその業績とその研究範圍とは正系的國學者と目せらるゝ各大人と大差ない程の偉大な學者であるが、この人もやはり正系的の國學者といはないのはどういふ譯かといふに、これはその國學の中心骨子たるものについての認識が確立してゐなかつたと思はるゝからである。卽ちその語學、國史、法制、神道の諸の研究が一の學として統一がついてゐない爲である。かやうに考へてくると國學といふものはただ漫然とわが國の言語や、文藝や、國史や、法制や、神道を研究するだけのものでなく、それら各部門の研究が相依り相關聯して居て、一の日本精神の發現であると認め、その源たる精神、卽ち古今を貫く精神を明かにせうとする唯一點がある。

しかし又この國學勃興以前の諸種の研究が國學の勃興に無關係であつたと

もいはれない。それらの研究が部分的にせよ前に行はれてゐたからこそ、この國學も新しい姿であらはれ得たのである。唯爾前の學は個々別々で統一が無く、中心點の認識などはもとより未だ無かつたのであるが、春滿の提唱によつてこゝに魂が入つて、すべて一の國學の分科として考へらるゝことになり、それと同時に活動を起したのである。その一の魂が國學の眞髓といはねばならぬ。

要するに近世興つた國學は、上古以來の神皇の大道を明かにせうといふことを眼目としてゐるもので、その研究法としては言語の研究を基礎として、それより國史、法制、神道等の研究に入り、而して古今を貫く國民的精神生活の原理卽ち古義を明かにするを本旨とするものであるが、その學としての方法の新しいが如くに、それは單なる復古では無くして段々に古義卽ち國民精神を闡明しつゝ行く進歩的の學問である。卽ちこの學問は顧みては古道、古義を明かにしつゝ進みては國家の前途を照しつゝ行く進歩的の學問であることは國學そのものの歷史の明白に示す所である。

しかし、ものゝ眞髓といふものはとかく忘れられがちなものであるが故に、國學といふものゝ眞髓も往々忘れられ易い。その最も淺薄なものはその入口の言語の研究に止まつてゐるものであり、少しく深く入つたものでも吉田令世の聲文私言に云つた如く「おのづから考證の學に墮落して」ゐるものが多い。明治維新の當時はまだ國學者の活動が盛んであつたが、その後間もなく洋化主義全盛の時代になつては國學といふものが、全然國家からも亡びよがしに取扱はれ、國學者も又多くは自暴自棄して語學か考證かを以て國學と考へてゐたやうである。そこで準官撰ともいふべき古事類苑さへも國學といふ名目を認めないで「和學」といひ、その和學をば「我國書を講究する學問の謂にして、中世以來漢學に對して稱する所なり」など云つてゐる。而して、このやうに國學の眞髓を再び自他共に認めずして來ることこゝに四五十年。この結果現代の如き世相を導いたものであらう。

# 五、國學と教育

これは岩波講座の「國語教育」第十回(昭和十二年七月發行)に登載したるものなり。これは、國學の應用的方面を說ける點に於いて、前二篇と精神同じくして擴充せられたる方面少からず、ことに今後の教育に關して考察を要すべき點を多少揭示し得たるものあらむと思ふ。

## 一

本講座からこの課題を以て起稿を要求せられたのであるが、かやうな課題を普通教育の方面から要求せらるゝに至つた事は誠に時世の變化著しいものあ

るを我々に感ぜしめる。若しこれが三四十年前であつたら、本講座は恐らくは一の發狂的態度として世の排斥を蒙つたであらう。今や時運が遷轉して、かくの如き問題を普通教育の方面から要求せらるゝに至つたといふ事はこれまさに教學刷新の根本義に觸れた感がする。しかしながら、自分の所見を以てすれば、國學といふものについての眞の理解がまだ世に行はれてゐない。又本講座にこれまであらはれたものについて見ても、その學的態度がやはり多くは西洋の模倣とかいふやうな嫌の少くない事を見るのである。しかしさういふ自分もやはり時世に感染して知らず識らず、その弊竇に陷つてゐるかも知れない。その點は切に大方の示教を仰ぐ事にする。

先づこの課題に對して問ひたいことは國學とは何ぞやといふことである。國學といふ語は從來いろ〳〵に用ゐられて來た例を見る。先づ第一には大寶令にいふ所の國學がある。この國學といふのは京都に設けられた中央學府たる大學に對して地方の國々に設けられた官立の學校のことである。この國學といふ學校は國司の管理に屬して郡司の子弟等を教育した所である。今我々のいはうとする所の國學はこの學校の事ではないので、學問としての國學である。

國學といふ名目についての變遷とか、沿革とかいふものは姑くおいて、今日われ〳〵のいふ所の國學といふものは、荷田春滿によつて提唱せられ、賀茂眞淵によつて繼承せられ、本居宣長によつて大成せられ、平田篤胤によつて擴張せられた一系の國學をさすのである。この國學といふものは實に荷田春滿によつて提唱せられたもので、その國學といふ一定の學問もこゝに生じたと云つてよいものである。さうしてこの國學が、賀茂、本居、平田の諸先生及びその門流によつて天下に廣く行はれ、その同志が、わが國内に充ち、それらの人々の活動が明治の維新を導く原動力となつた。もとより明治の維新は内外種々の衝動によつて導かれた結果であつて、たゞ國學の力だけで生じたものとはいはれないであらう。しかしながら、それらの種々の動力のうちに於いても、國學が最も有力なものであつたことは今こゝに一々證據をあげるまでもなく明々白々のことである。

國學はかくの如く明治維新の原動力をなすほど有力なものであり、又活潑なものであつたが、明治維新以後多くの歳月を經ないうちに、その活力を失つてしまひ、今日に於いて國學の名目は殘つてゐても、たゞ古い語とか、古い物語とか、歴史とか若しくは神道とかいふことを隅の方にかゞまつて小さい聲でぐず〳〵いうてゐる學問の如くに見られて、國家の進運と無關係の如くに思はれることになつた。これは現在でもまだその通りと云つてよい有樣である。この國學は明治十五六年頃から後は殆ど瀕死の狀態に陷つたのであるが、社會國家はこれを見ることは路傍の人の如くに冷淡であり、寧ろ自然の消滅を希望してゐたかも知れない。たま〳〵國學などいふことをいへば國語、國文、國史の大家先生などゝ仰がれてゐた人々までが、先に立つて冷笑したもので、さやうな事をいふものは莫迦の標本とも見られたやうである。この事は空想ではない。私自身にもかやうな侮辱をうけた經驗が一再ならずあるのであるから、決して虚言ではない。

そも〳〵國學をしてかやうな侮辱を受けしめ、かやうに衰へさせたについては國學者そのものにも責任が無いとはいはれない。しかしながら、明治十年頃からの上下一般のとつた歐化政策が、極端にわが國粹の破却に力を致した結果といはねばならぬ。當時の政府の眞の目的はどこに在つたか、それは局に當つた人でなければわからない事であるが、その頃の志ある人をして、政府は神社をして自然消滅に歸せしめる方針でないかとまで心配せしめたものである。一國の宗祀たる神社に對してさへこの方針に出たらしい政府が、國學などに目もくれなかつたのは寧ろ當然であつたらう。この頃には社會も國家もたゞ西洋化することを行動の第一義とした。それ故に西洋にその名も實も無い神社とか國學とかいふものが一も二もなく舊來の陋習の見本の如くに見えたのかも知れない。

かやうに思はれ、かやうに取扱はれては意氣地の無いものは、この苦しい境界から最先に逃げ出すことは當然であり、稍々氣概のある人々も最初の間にこそ、これに對抗もしたであらうが、二十年、三十年と續いては氣力も盡きたであらう。尤もどこまでも踏みとゞまつた豪傑も無かつたとはいひ得ないのであら

うが、それらの豪傑の士は果して、明治維新を指導した從前の國學はた國學者ほどの氣力なり、活力なり、又實力なりを發揮し得たかといふに、遺憾ながら私は然りと答へることを得ない事を見てゐる。こゝに私は國學者その人々の責任が存すると思ふのである。それは一寸考へてみてもわかるのであるが、歐化政策の大怒濤が押し寄せて來た時に之に對抗し、それを打倒せうとするものはその歐化政策の缺陷なり誤謬なりといふものを敵者に認識せしめねばならぬのであるが、國學者がたゞわが國古來の事實を例示するに止まる位であつたら、どうしてこれを食ひとめることが出來るか。これら歐米第一主義者の謬想の根本を指摘するには明治以前に起つた思想だけを以てしては何ともする事が出來なかつたのは當然である。凡そ國學といふ學問が何の爲に起つたのであるか、又どういふ風に發展してきたかといふことを考へてみるならば、この明治維新以後にはその時世にふさはしく、又その時世を指導するに足るだけの實質が無くてはならなかつたのであるが、明治維新以後の國學にはこの活力が一も見られないし、又國學者にそれだけの修養も無く、又それだけの見識も無かつたと思はれる。かやうな有樣では社會國家の進運を指導するどころか、社會國家から置き去りにせらるゝも亦或は尤もといはねばならぬ點もある。それ故に明治以後の國學の衰運は國學者自身と社會國家との二者に責任が有ると思ふのである。

かやうに考へてくると、こゝに國學とは何ぞやといふ問題を是非とも明かにせねばならぬ。それについては今日普通の人が國學と云ふものを何と考へてゐるであらうかといふ點を顧みる必要がある。今の人の國學と考へてゐるものゝ範圍は何であらうかといふに今その一例として國學者傳記集成といふ書を見よう。これには慶長五年に歿した中院通勝からはじめて、明治三十六年に歿した落合直文まで六百八十餘人の傳を集めてゐる。(近頃その續編も出たがそれも精神は同じである。)これはこの書に載せた人々はみな國學者であり、その修めた學問はみな國學といふべきものであると、この編者は認めたものであらうし、又この書の校閲者及び之が序をものした學者も亦さうと認めたものであらう。しかしながら、この書に載せた人々はすべて皆果して國學者といひうる

であらうか。たとへば江戸名所圖會、東都歳事記を著した齋藤幸孝及びその父幸雄、その子幸成が、それらの著述の故に載せられてゐるものと思はれるが、かやうな名所圖會の編纂が果して國學といひうるものであらうか、私はこの父、子、孫三代にわたつて名所圖會を完成した美談を讃歎することに於いては人後におちないつもりであるが、これが果して國學であらうか。又深草の元政上人、涌蓮、辨玉といふ如き人、祇園の三才女といはれた梶子、百合子、町子の如きは果して國學者といふべきであらうか。又書道で名高い角倉素庵、倭漢三才圖會の著者寺島良安、韻鏡學者たる僧文雄、醫者で旅行家であつた橘南谿の如き人は果して國學者といふべき事をなしてゐるのであらうか。私は、今この書の當否を問題としてゐるのではない。明治時代の國語、國文、國史の大學者と信ぜられてゐた人人の間にもかくの如く認められてゐたといふ事を例として述べたのである。さうしてこれらの例に基づいて考ふれば、たゞ日本國に行はれてゐる事を日本文で書けば、即ち國學であるといふ事に認められたといふべきである。しかしながら、かくの如きものが果して國學であるであらうか。明治時代に國學の衰へ、國學といふ名目の意味さへもわからなくなつた事は國學者傳記集成といふ書一冊を以てしても明白に證明しうるのであるが、假りに上にあげたやうに、たゞ和歌をよんだとか、和文の著述があるとかいふに止まるものを除いたら、あとは皆國學者といひうるかどうかといふに、それはさう簡單に答へる事は出來ない。

私が、こゝにいふ所は既にいふ如く、荷田春滿によつて提唱せられ、賀茂、本居、平田三大人によつて繼承せられ、大成せられた一系の學問をさすのであるが、それが如何なる目的と精神と態度とを有するものであるかといふことは、別に端をあらためて說かねばならないものであるが、それについては先づ國學といふ語が、いつ如何に學問の名目として用ゐられたかといふことを考へてみよう。

## 二

學問の名目としての國學といふ語がいつ興つたか私はまたそのはじめを知らぬ。世にいふ所の菅家遺誡には、

凡國學所要雖欲論涉古今究天人其自非和魂漢才不能闚其閫奥矣。

とあるから、菅原道眞公の頃に既にさういふやうになつてゐたとも考へられるであらう。しかしながらこれは谷川士清の日本書紀通證の卷一の彙言のうちの譯原の注に菅家遺誡の文を引いて、その次に士清が加へた今按のうちの文章であることは、通證を注意してよめばわかるのであるが、それがいつの間にか菅家遺誡の文と誤り認められたのである。この事は、はやく谷森種松が之を唱へ、六人部是香の篤能玉久志の中にも說く所である。それ故にこれは谷川士清の語であつて菅公の語ではない。國學といふ語で、私の知つてゐるものでは元亨釋書に見ゆるものが一番古いやうである。この書は京都南禪寺の僧虎關師錬が、元亨二年に著して後醍醐天皇の乙夜の覽に供し奉つた書で、本邦の僧史のはじめをなすものであるが、その卷十、增命の贊のうちに國學の語を用ゐてゐる。これは文德天皇が幼僧の人才を鑑選せしめられた時に增命が十四歲にしてその選に入りて學才人を驚かしたことをその傳に叙してあるのに對しての贊であるが、その文に曰はく、

予早逸遊從事於竺墳（竺墳とは印度の書のこと）以故瞽之國史矣。偶因修僧史少見皇家之治迹焉。而李唐之代（代宗懿懿宗）趙宋之眞（眞宗）仁（仁宗）之所不逮也。至仁壽聖皇（文德天皇）差名大夫鑑選吾徒之稚雛者永平以來（漢土に佛教の渡來した時）未聞是等盛擧焉。蓋帝者之於佛乘也、機餘（萬機の餘）之介事耳。其見微細者如彼。況大者乎。嗚呼梵學猶若彼況國學乎。國學者藝術也。況廟堂乎。

とある。こゝに國學といふ語を用ゐてゐるが、これは如何なる意の語であらうか。谷川士清の倭訓栞の中に次の如く說いてゐる。

國學は倭學也。神學あり、歌學あり。虎關の國學者藝術也といへるは有職者流を指ていへるにや。道德に關らぬ如くおもへるはいぶかし。

こゝに國學は藝術であるといふ、その藝術といふ語が、今日いふ所の藝術でないことはいふまでもないが、果して谷川のいふ如く有職をさすのであらうか。同じ倭訓栞の「げいじゆつ」の下の說明を見ると、

藝術也。後漢書の注に藝謂書數射御、術謂醫方卜筮也。

とある。谷川のいふ所は恐らくはこの意での藝術なのであらう。然らば果してこれが妥當なのであらうか。この語は後漢書安帝の永初四年の詔の中にあるのである。さて又晉書には列傳の一として藝術傳といふのがある。それに傳した人々は天文、歴算、卜筮、陰陽、占候をよくした人々である。しかしながら虎關のいふ所はこの晉書の藝術とも思はれぬ。彼のいふ所の國學といふものは、天皇の治道を翼け奉るべき學問であることは明かである。わが國に於いては儒學を以て帝王の學とせられた事はあるけれども、天文、卜筮、暦數の學を以て帝王の學とせられた事を見ない。藝といふ語は古、學問技能をさしたもので、周禮大司徒に「六藝、禮、樂、射、御、書、數」とあるその藝の意であらう。術といふ語は儒術をさしたものである。史記の儒林傳に「及レ至ニ秦之季世一焚ニ詩書一阬ニ術士一、六藝從ニ此缺焉一」とある、術士は即ち儒者をさすのである。而して儒士の學ぶべき學に四術といふのがある。禮記の王制に「樂正崇ニ四術一立ニ四教一順ニ先王詩、書、禮、樂一以造レ士」とあるが如く、詩書禮樂の四學が即ち四術である。この六藝四術が儒學に於ける必須の學術である。私はこの六藝四術を約めてこゝに藝術と云つたものと思ふ。即ちその「國學者藝術也」と云つた精神は藝術即ち儒士の學で、經學を中心とした治國平天下の學の意であつたであらうと思ふ。さうすると虎關のいふ所の國學といふものは國家といふ意識と道德とが骨髓をなしてゐたものであらうと思ふ。谷川が「道德に關らぬ如くおもへる」と云つたのは谷川の誤解であらう。

虎關の示した國學といふ語は頗る注目すべきものであるが、この虎關の語は虎關の創めて之を用ゐたものとは思はれないので、この意の國學といふ語が虎關以前に既に存してゐたのであらうが、今、それをつきとめる材料をもたぬから姑く虎關の語として論じよう。さて、この虎關のさす所の國學は藝術也と云つたその藝術の意は既に述べた所であるが、その國學といふ所の當時の實際のものは倭訓栞のいふ如く、有職の學を主としたものであらう。何となれば、六藝四術は元來支那傳來のもので、そのまゝではわが國の學とはいひ得ないものであるが、それが本邦の政治の道として取扱はれてある時に、國學といひうべきことになるのである。而してそれが治道に於いての法制禮儀の學となるのが自然であるのみならず、當時の治道は實に有職を主としたものであつた。而して、か

やうな意味に國學といふ語を用ゐたのは後には正保四年版の延喜式の跋の中にも見ゆるのである。しかしながら、これが虎關の語から系統を引いてゐるとも思はれない。

虎關の云ふ所の國學といふ語は注目すべきものではあるが、この國學は後世に直接に系統を垂れなかつた。これは吉野朝時代の戰亂で學問が正しく傳へられなかつたが爲であらうか。近世になつて國學といふ語が如何樣に用ゐられたかといふに元祿頃に編せられた佐賀藩の葉隱即ち鍋島論語と稱へられるものに「御家來としては國學心掛くべきなり」とか「御被宮ならば、餘所の學問無用に候。國學得心の上にては餘の道も慰みに承る可き事に候。よく〳〵了簡仕り候へば、國學にて不足の事、一事も無之候」とかいろ〳〵云つてゐる。その趣旨、本意は後に起つた國學と精神の相通ずる所のあるものであるけれども、その國といふのはその藩國をさしたもので、大日本國の意義ではないから、眞の國學の意にはまだなつてゐない。大日本國の學の意での國學といふ語は、上に引いた通り倭訓栞に見ゆるのであるが、著者谷川士清は垂加流の神道を學んだ人である。その谷川より先に同じく垂加流の神道學者たる吉見幸和の寛保三年に記した神道初學記に學規の大綱といふのが載せてある。それは三條であつて、その第一には神道をいひ第二には國史をいひ、第三には、

國學の儀は誰によらず、學べしといへども云々

と云つてゐる。又同じ人の著した五十鈴川記には、

神學は國學なり。其國に居て其道を學ずんば有べからず。

とも云つてゐる。これによると、神道の學即ち國學で、神道と國史とがその研究すべき科目である。谷川の說は既にあげた通りこれと稍々違つて國學即ち倭學で、そのうちに神學と歌學とがあるといふことになる。

こゝに倭學といふ語があらはれたが、この語はいつ頃からいはれたものであらうか。村田春海は和學大概といふ書を著して和學といふものについて說いたが、それには「大江の匡房の和學得業生問答といへるものあるを見れば」堀河院の御時頃から和學といふ名目が在つたと云つたが、これは誤解である。それは續本朝文粹や朝野群載にある和歌對策といふ擬作の文に和歌得業生といふ名

目を用ゐてあるのを誤り認めて立言したのであつて全然問題にはならぬ。現在私の知つてゐる範圍では、林春齋が、寛文六年に定めた忍岡家塾式に五の學科目を立てた中の一科に倭學科といふ目を設けたのを古いものと認める。これをはじめとすることも出來まいとは思ふが、この名目は江戸幕府以前に在つたかどうかは問題である。しかし、名目は未だ起らなかつたとしても、元亨釋書にいふ如く、國學若しくは和學といはるべき事實の或るものは古くから行はれて來たであらう上述の和學大概には和學には四の時期を立てゝあげてある。その說によると、弘仁、承和の頃の日本紀の講說を第一期とし第二期は大江匡房の頃とし、第三期は一條兼良の時とし、第四期は元祿以後であるとした。しかし、この和學といふ名目は荷田春滿の創學校啓の草稿に見ゆるから、或は春滿の時からさう云つて來たのかも知れないが、一般には國學と云つたと認められてゐる。和學といふ名目と國學といふ名目とは內容は同じだとしても國學といふ名目の方が、國家といふ意義が著しいから、專らこれを用ゐるやうになつたらしい。春海は眞淵の門人として千蔭と相並んで稱せらるゝ才人ではあつたが、所謂漢心を極端に排斥することを好まなかつたらしいから、恐らくは國學といふ名目を好まないで、和學といふ名目をふりまはしたのであらうが、和學といふのは日本の學といふ名目で、國學がわが國の學であるといふ解釋を下しうるものであるとすれば、大差ないかのやうにも見ゆる。今こゝで國學の本質を說くことは姑く見合せとするが、春海のいふ和學はこの廣義の日本の學の意であるとすると、それには日本國に存する事を研究するもの一切をさすともいひうるものであるからして、それは國學者傳記集成に載せた所と大差ないものであつて何等特別の意味も精神も無いもので、古道具屋の店のいろ〳〵のがらくたや、又貴重な美術品などが雜然として陳列してあるやうなもので、それらの陳列を總稱して古道具屋の店といふと一般の事になるであらう。若し、學問の古道具屋の店の如きものであるならば、世間から侮蔑せられることも或は尤もであるといはねばならぬ。しかし、國學なり、倭學なりといふものは果して古道具的の學問であらうか。

春海の考へてゐた和學といふものは、上にいふやうながらくた學問ではなか

つた。春海の考へてゐた和學は如何なるものであつたかといふに、彼は「凡、和學に三科あり」と云つてゐる。その三科は何かといふに「第一に國史實錄の學を一科とす」「次に律令典故の學を一科とす」「次に古言を解釋するの學を一科とす」と云つてゐる。この春海の考へ方には神道といふものが加はつてゐない。これは春海一流の考へ方に基づくもので注目すべき事項に屬する。

倭訓栞の國學即ち倭學の說明には「神學あり、歌學あり」とある。これはその國學即ち倭學のうちの分科として神學と歌學とがあると語つてゐるのであるが、問題はこの二つだけがその分科なのであるか、又は分科が他にもあるけれど、この二つを主要とする意味か、明白にはわからないが、しかし、他に分科があるにしても少くも、この二つが主要なものであることを告げることは間違が無い。その神學といふものは本邦固有の神道の學である。而してその歌學といふのはたゞ歌を學ぶといふだけでなく、國語國文の學までも含めてゐるものと見らるる。たとへば契沖の假名遣の研究はもとより歌學の爲と本人が云つてゐる。しかもその以前の定家假名遣が物語草子を正しく書かうとする爲に選定せられたものでたゞ和歌だけのものではないのである。手爾波の學問もゝとは歌學から出たもので、それが發展して近頃の國語學にまで開展したものであるから廣義の歌學である。それ故に倭訓栞のいふ所の神學あり、歌學ありといふことは上の如き意味を含んでゐるものであるが、谷川士清自身のなした學問それ自身が之を實現してゐる。彼はわが國最初の、しかも空前の學術的なる大辭書たる倭訓栞を著してゐる。これが、歌學そのものゝ開展した結果である。彼は又日本書紀に關して空前の考證的なる註釋たる日本書紀通證を著してゐる。これが神道そのものゝ開展した結果とも見らるゝのである。それから降つて和學そのものを具現してゐる著しいものは塙保己一の和學講談所である。ここで教授した科目は如何なるものであつたかは今詳かにし得ないが、しかしその講談所で活躍した人々、又そこで出版した書籍などを見ると、春海の所謂第一科と第二科とを主としたものと思はるゝ。

以上國學といひ、和學と云つたものは略ゝ似たものゝやうでそれらを綜合して考ふる時には、神道、國史、法令、典故、和歌、古言といふやうな科目を立てゝ考へら

るべき點があると思はるゝ。かくの如くにしてこの學の範圍も分科も亦略ゝきまつてゐるやうである。然らば、以上述べた所を綜合して、それを總稱して國學と云つたものであらうかといふに未だ遽かに然りと答ふる譯には行かぬ。

以上は國學、又は倭學といふ語の用ゐられて來た場合をいろ〳〵の方面に見たのであるがわれ〳〵の考へてゐる所の國學の神髄には未だ觸れてゐるとはいはれない。われ〳〵のいふ所の國學又國學者にはおのづから嚴密な意義と範圍と精神とをもつてゐるものである。この嚴密な精神での國學といふものは實に荷田春滿によつて基礎を確立せしめられた學問である。それ故に私は次には端を改めてその春滿の提唱した國學について考へてみようと思ふ。

## 三

既にいふ如くわれ〳〵のいふ國學にはおのづから嚴密な意義と範圍と精神とをもつてゐるものである。この嚴密な精神での國學といふものは實に荷田春滿により基礎を確立せしめられたものである。さうしてその說く所は確かに國學の本質とその研究態度の正鵠とを示してゐる。それ故に、苟もわが國學の本義本質に觸れようとするものは必ず先づその提唱者たる春滿の說く所を十分に考慮せねばならぬものである。然るに世人は往々にしてその末の本居平田二氏だけについて論じてゐる。これは國學の大本について思を致さず、徒らに枝葉の問題に沒頭する弊を有するものゝ陷り易い缺陷である。私は本居平田二氏を輕んぜよなどゝは夢にも思はないのであるが、それら二氏が基となり、源となつてゐる春滿の說を一顧もせずして國學の精神なり、本義なりを說く人々の態度をあきたらず思ふのである。

荷田春滿の傳はこゝにいふ遑をもたぬ。たゞ彼が、京都の稻荷神社の祠官の家に生れ、通稱は羽倉齋と云ひ、わが國の古典に精通して、名聲世に高く、門人も多かつたが、元文元年七月二日に年六十八で歿したといふことを說くに止める。

春滿の主張はその人の創學校啓に見れば、明かに知らるゝ。これは、その主張する國學の學問所としての學校を京都東山に創立したいといふことを江戸幕府に請うた時の啓文であるが、その志願は實現しなかつたけれども、その精神は

既に述べたやうに、賀茂、本居、平田の三大人により、又それらの門流によつて、永く傳はつて滅ぶることはない。この啓文は板本も二三種あるが、その草稿が京都の羽倉家に保存せられてあつて、近頃出版せられた荷田全集第一卷の卷頭に活字にして載せられ、又荷田春滿大人の一生といふ小冊子にはそれの寫眞版での複製が附載せられてある。この啓文をば藤岡作太郎氏が明治三十四年頃の東京帝國大學の講義で「この啓文なるものは平田篤胤の上梓せしものにて、殊に漢文體の意外の名文なれば、或は平田派の僞作なるかも知れず」明治四十四年六月發行の東圃遺稿にある)と云つた由であるが、これは、その草稿の現世に傳はつてゐることも知らないのみならず、これがはじめて板になつたのは春葉集であるといふことをも知らないで漫りに罵つた言であつて人をあやまり、世をあやまつた責任は輕くない。春葉集は明治三十年十二月に發行した續日本歌學全書の第一編賀茂眞淵翁全集上卷といふものに載せてあるけれども、その附錄ともいふべきこの啓文をばわざと省いて載せてゐない事はその解題に既に述べてゐるのである。原本の春葉集は寛政十年孟秋の刊行であるが、これにはその啓文が附錄として四枚の堺紙に書いて載せてある。この寛政十年の頃には平田篤胤は未だ本居の學にも志を傾けず、平田家の養子にもならず、江戸に於いて辛苦艱難を嘗めて居た時である。それからこれが漢文で書いてあるのを彼是いふ人もあるが、これも時代を知らない人間のいふ事だ。明治維新までは朝廷の公式の文書は詔勅でも法令でも表啓でも漢文を以てすべきものである。幕府が、候文を以て自己の執務上の文書の式としたのはそれは幕府內部でのことで朝廷には正式に認められたもので、ない。とにかくかやうな見當違ひの見解で、古來の正しい事實に漫りに放言非難したことは明治以來の學者の通弊であるが、これも國學を侮辱したと同じ精神に出づるものだ。

この啓文は草稿と刊本にあるのと文句に多少の相違はある。ことに著しいのは草稿に倭學とあり、刊本に國學とある點だが、本旨はかはらない。この啓文といふものが、近世の國民的大活動の一たる國學の精神的淵源であり、指導原理であつて、國學の神髓は一にこゝに存するのである。その說く所によると次下は刊本の文を主とする)

在我神皇之教陵夷一年甚於一年國家之學衰墜存十一於千百格律之書
缺滅復古之學誰云問詠歌之道敗闕大雅之風何能奮今之談神道者是皆
陰陽五行家之說世之講詠歌者大率圓鈍四教儀之解。

といひ、

國學之不講實六百年矣。

と歎き、更に又、

悲哉先儒之無識無一及皇國之學痛哉後學之鹵莽誰能歎古道之潰

と云つてゐる。これらの言によつて見れば、その主張する所の學は「國家之學」であり、「皇國之學」であつて、國學といふのはそれらを約めて云つたものであらう。而して、その國家之學の講ぜられざること六百年といふ所を以て見ると、大體院政時代頃からこの學が講ぜられずして當時に及んだと思つたに相違ないことになる。然らば、その頃若しくはそれより以前にさういふ意味での國學といふ名の學問が在つたかといふに我々は之を知らない。しかしながら、虎關が云つた所の六藝、四術の國家の治道に關係する學術は後三條天皇のころまで在つたと見たものであらうと想像せらるゝ。それらの學は國學と云ふ名が無くても皇國之學、國家之學といふべき實質が在つたと春滿は見たものであらう。この考へ方は國學の由來及び本質を考ふる上には實に重大な鍵である。さて、その國學は何を目的としたかと考ふるに、既に上にあげたやうに、それは「神皇之教」の陵夷を歎いて、これが復興をはかるに在つたのである。即ち彼はその素志を述べて、

自少無寢無食以排擊異端爲念。以學以思不復興古道無止

といふが如くに、神皇之教卽ち古道を復興せうとするのが本旨であるが、それは專ら國學によらねばならぬとした。さうしてその國學なるものは彼が、

復古之學誰云問。

といふ所の「復古之學」であり、又

古義不明則古學不復焉。

といふ如く「古學」とも云つた。これらによつて見れば、その明かにせうとしたのは「神皇之教」であり、之を道として見る時は「古道」であり、それを學として見る時は

「古學」であるといふことになる。それ故に純正の國學をなす學徒が古學といひ、古道といふ名目で、その學、その道を呼ぶのはその源がこゝに在るのである。

こゝに國學が復古之學であり、古學であると云つたが、それは古代を漫りに謳歌して、一も二も無く古の姿にかへさうとするのであらうか。これはその復古之學といふ名目によつて、さやうに誤解され易い。しかしながら春滿は既に述べたやうに　神皇之教が六百年間もすてゝかへりみられなかつたのを遺憾として之を復興せうとしたのであつて、たゞ徒らに古を尚ぶといふのが本旨ではなかつたといふことはその啓文によつて明かである。即ちこの古道、古義なるものは支那人のいふ所の道の經であつて古今を貫いて存すべきものであるからして、その古の道、古の義を今の世に明かにせうといふのが、本旨であつたのである。

然らばそれらの古學を明かにし、古道を知らうとするには如何なる手段によるべきかといふに、彼は、

古語不レ通則古義不レ明焉。　古義不レ明古學不レ復焉。

といひ、又

先王之風拂レ迹、前賢之意近レ荒一由レ不レ講語學是所以臣終身精力用盡古語也。

といつてゐる。即ち、これは古語を正當に理解することを以てこの學問の第一歩とすることを強力に主張してゐることを示すものである。かくして春滿自身は實に最も多くこゝに力を注いだ。それ故に、彼自身

臣之至愚何之知。所不敢自讓者語釋也。

と云つてゐるのは決して自讃ではなくして實に全力をこゝに注いだ事の實際を語るものであらう。

以上述べた所で、春滿の主張するこの國學の目的と出發點とは明かになつたであらう。それでは、この　神皇之教、古義、古道を明かにするには如何なる事項を研究するのであるかといへば、彼の啓文の中に、

格律之書既滅、復古之學誰云問。

といひ

詠歌之道敗闕、大雅之風何能奮。今之談神道者、是皆陰陽五行家之說。

といひ、又

六國史明則、豈翅官家化民之小補哉。三代格起則抑亦國祚悠久之大益哉。

萬葉集者國風純粹、學則無面牆之譏、古今集者謌詠精選、不知則有無言之誡

といふ所を見れば、

神道、法制、國史、和歌、

といふ如きものがすべてその研究對象であるといふことを見る。而して春滿一生の研究したもの、著述したものを見るにまさしくこの言を實地に證明する所があると云ふべきである。

要するに、上述の啓文一篇は即ち春滿の心血の結晶したもので、國學といふものゝ發祥する所である。この啓文を顧みないで、國學を論ずるものは、魂を忘れて手足に讃美するものである。國學といふものゝ神髓は上に述べた所によつて明かにわかるのであるが、要するに、古語の研究を基礎として、古義を明かにして、依つて以て神皇の大道を明かにせうとするものである。而してこの目的と手段とが次々に繼承せられ、段々に明徵にせられ、つひに明治維新の有力な原動力になつて働いたものであるが、私はその春滿の學問研究の態度についても亦說くべきことがあるから、その事を次に述べよう。

荷田春滿はその目的たる國學校の創立を見ずして死んだ。さうしてその學校は遂に實現することなくして終つた。しかしながら、その精神は脈々として後世に生き傳はつた。これはその學問が、國家の生命に觸れてゐたといふ所もあるが、その研究態度が生氣に滿ちてゐた爲でもある。世人はよく玉勝間にある「師の說になづまざる事」を以て、學界の美談とし、國學の研究態度の明朗であることを證するものとして、吾も人も感歎するものであつて、本居宣長の學問も之が爲に一段の光彩を放つものと稱せられてあるのであるが、これは本居一人の態度に止まるのではなくしてその師賀茂眞淵の敎へであつたことは、その文の中に、

これすなはちわが師の心にてつねにをしへられしは後によき考への出來たらんには、かならずしも師の說にたがふとて、なはゞかりそとなむ敎へられし。こはいとたふときをしへにてわが師のよにすぐれたまへる一つ也。

と云つてゐるのでもわかるが、それも、賀茂眞淵の自己一人の發した態度ではなくしてその師たる春滿の態度であつた春滿の歌集たる。春葉集の序文に荷田信美が、春滿の語としてあげた語に、

いでや、まなびの道は天が下の大道なれば、おのれひとりたてらむがごとくほこるべからず學ぶ人も師のをしへなりとて、あながちに泥むべからず。

とある。この態度が國學の研究をして常に生氣に滿ちて、生々發展止まる所を知らないやうに向上せしむるものである。國學を固陋であると考へる人は、この研究態度を聞いたゞけでも愧死すべきであらう。

國學は上述の如くにして、荷田春滿によつてはじめられたが、春滿の門人も少くなかつた。その中に、國學の正統者として中心と仰がれたのは賀茂眞淵であつた眞淵の門人も少くなかつた。ことにその頃になると國學の勢力は頗る盛んになり眞淵の學風は餘程世間に影響し門人も師春滿の門人に比しては頗る多かつた。そのうちにも傑出して國學の正統者として仰がれたのは本居宣長であつた。宣長の時にはその學問が、日本全國に風靡して、國學の勢ます〳〵盛んになつた。その多くの門人の中でも平田篤胤がまた最も傑出して、その學の正統を傳へたと稱せらるゝ。篤胤に至つては門人ます〳〵多く、これらの門下から、明治の維新を導いた志士が少からず出たことは世間周知の事である。かやうにして春滿の唱へた國學が、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の諸大人によつて繼承せられ、それが學としては益々開展して明治維新の指導原理になつた。さうしてこれらの學者はそれ〳〵その主とする點に差異はあるけれども、春滿の指南に基づいて、着々實現して來たことはそれら各大人の業績によつて明かであるが、それら各大人の業績を見ると、その學問の研究方面も、又その成果も歩一歩明かにし深められて來たことがわかるが、それと共に所謂古道なるものも歩一歩高められて來た。

はじめ春滿は古語の研究を以て斯學の最初の入口とした。古語が明かにならなければ、古義がわからないとした。それで春滿の最も力を注いだのは、古語の研究であり、自身も古語の研究に於いては決して人後に落ちないといふ自信をもつてゐた。かの萬葉集童蒙抄の如きは彼の古語研究の記錄といはねばな

らぬ。しかしながら、古語の研究は容易でない。春滿の一生を盡しても決して完結したとはいはれない。之を受けて立つたのは眞淵であつた。眞淵の萬葉集の研究及び冠辭の研究は今日から見れば、不完全の評を免れないとしても當時に於いては破天荒の卓見に富んでゐた。しかし、眞淵はこの古語研究にその一生を獻げてしまつた。一體古語の研究は國學の上には甚だ重大な事柄で、この關門を通過しなければ、その堂にも室にも入ることが出來ないものである。この古語の正當なる理解を基礎とするといふ點が、國學以前の神道研究などゝ國學との分岐點をなすものである。國學以前の神道研究にも名論卓說が決して無いのではない。しかし、我々が、その神道の研究にあきたらないといふ感をいだくのは、その研究が古語の正當なる研究といふ基礎の上に立つてゐないといふ點にある。即ちその名論卓說は基礎の確實性を有しないといふ不安があるのである。國學は必ず、その言語上の正當なる理解を得ての上に見解を立つべきものだとする態度をとる。もとよりその言語上の理解が正當でなければ、その上に立てた見解も正しくない事になるのであるが、とにかく方法論としてはこの方が正當であることはいふまでもない。

賀茂眞淵が萬葉集を研究したのは實は萬葉集の研究そのものが最終の目的ではなかつた。その目的は春滿の所謂古語を明かにして古義をさとらうといふことにあつたのである。それ故に、眞淵の著にはこの精神で著したものが多く、又この精神でよまねば分らぬものであらう。しかし、古義を明かにすることも最終の目的ではなくて古道を明かにすることが最終の目的であるべき筈である。それで、本居宣長がその意をうけて古事記傳を著して一生を之に捧げた。これは古語の研究を基礎として、專ら古義を明かにせうとする所に主眼點が在つたのである。

元來古語の研究はわが國では古來からあつたし、ことに、元祿の頃の契沖の萬葉集代匠記は古義の研究の上に一大時期を畫したもので、春滿なども、之が影響をうけたものであらうことは疑ふべくもない。春滿は代匠記を手づからも寫し又人にも手傳はせて寫して持つてゐたことは著しい事であるが、彼はその契沖の研究に基づいて更に一歩を進めた。しかし、たゞ、それだけならば、契沖が國

學の祖といはれてもよい筈であるが、古來さうは認めて居ない。それは何故かといふに、國學は古語の研究といふことを極めて大切にするけれども、しかし、決してそれに止まつてゐるものではなくて、その語の研究を基礎として古義をさぐり、その探り得た古義に基づいて古道を明かにせうとする所の學問である。契沖に於いてはこの古道を明かにせうといふ態度を意識的には示してゐない。われ〳〵が契沖を古語の偉大なる研究家として尊敬しつゝも國學者といふことを得ないのはこの點にあるのである。隨つて國學者といふ以上はこの古道を明徴にせうといふ最終の目的を有するものであらねばならぬ。そこで、たちかへり、かの春滿以下の學者を見るに、春滿にはその古道を具體的に表現した著述を見ない。これは事草創に屬して、未だ之をまとめるまでに至らなかつた爲でもあらうか。眞淵に至つては國意考を中心とした思想が、彼の見た古道そのものであらう。本居宣長に於いては、古事記傳の附錄として著した直毘靈を中心とした思想となつて世にあらはれた。以上は、その道を說くことが主ではなかつたが、平田篤胤に至つては所謂復古神道といふ名で呼ばるゝ道を一往完成したやうな狀態にまで導いた。これは春滿が蒔いた種が萠え、榮え、茂り、花さき實なつた結果ともいふべきであるが、一は時世の要求もあつた。しかし平田篤胤に學問的研究が無いのではない。篤胤の學問的努力と苦心とはその先輩にまさるとも劣るものではないことはその多くの著述について精査して見れば明かである。古語の研究によつて古義を明かにし古義を明かにして古道を闡明しようといふ春滿の目的はこゝに篤胤によつて一往の答案を得たといはねばならぬ。さうしてこの篤胤の復古神道といふものは精神的には復古神道と云ひうるものであらうが、それは決してたゞの復古ではなくして一面から見れば神道そのものゝ展開であつたのである。さうしてこのやうな展開は上に述べた師の說になづまぬといふ生々發展を主義とする研究態度の自然の結果こゝに至つたものといふべきであつて、かくの如くにして國學は永遠の生命を有すべき筈である。

## 四

なほこの國學が如何なる學問であるかを知らうとするには、この國學の發生した歴史上の原因に徴することも一つの捷徑である。この學の歴史をばたゞの斷片的の事實、たとへば、古來行はれた日本紀の進講とか、和歌の學問とか、法制の研究とか、故實の取調とか、神道の講述とかのそれ〴〵の斷續せる個々の事項に求めそれらが集注して、近世の國學となつたといふ見方もあるやうであるが、これは最も幼稚な臚列的な機械的な見方で、國學の本質を全然知らない人の言といはねばならぬ。その他或は當時漢學者の間に古文辭學が盛んになつたにつれて生じたものであるといひ、又一般的に起つた復古主義につれて起つたものであるといひ、又當時の時勢に應じて地下の間から、一種の革新的の思想運動として起つたものだとか、種々に考へられ論じられてゐるが私はそれらの說を部分的には否認はしないが、それらがこの國學の勃興すべき主たる原因とは考へてゐない。それらは佛教的の語でいへば、皆緣であつて因ではない筈である。國學の勃興についてはわが國家の歴史を大觀すれば實に起らざるを得ずして起つた必然性があつての事で、これは決して偶然の事項ではないといふ事がわかる。この事については村田春海の和學大概の言を味つて見るがよい。

我國の儒生はかならず、我國の國史典故に通ぜずして叶はざる事なるを、當世は學問の道、草莽にのみあれば、儒者皆曲藝の士の如くになりて、儒者の任はたゞ漢土の書にのみ通ずるをおのれが業とのみ心得、我國の事は其業の外の事のやうにおもひたるは學問の本意を失へるもの也。

と云つてゐる。さうして春海は更に林春齋が、その家塾に倭學科を立てたことを賛して次の如くにいふ。

林春齋が諸生を教る五科のうちに、和學科をたてけるはこゝろある事なり。すべて儒生の業は經國治世の術なれば、我國にありては古へよりの建國の大體と制度の沿革、人情世態の變遷し來れる有さま、萬の事をよくしらではいかでその學問の道をほどこすべきやうあらん。されば和學をば、かならず要務とすべきなり。

とある。この春海の言は實にわが國古來の教學の本旨に觸れたものである。

從來、國學の勃興を論じた人々がこの重大事實を顧みないのは之を知らないの

であらうか、はた又之を蔑視したのであらうか。私はこゝに姑くわが古來の教學につき略述しなければならぬ。

わが國の古、儒教が三韓の媒によりて輸入せられてから國家が之を採用せられて、儒學がわが教學の主要なものとなつた事は誰も知つてゐる事實である。これはわが國を支那にしてしまふといふ方針から出たのではなくて、實にわが神皇の道の羽翼たらしめむが爲であつた事は神皇正統記の說を待つまでもなく明かな事である。それゆゑに、天智天皇の御世から起つた大學國學に於いて、漢學を主として御採用になつたけれども、その精神は虎關の所謂藝術であつた。それといふのも、大化の改新から以後わが國家統治の大綱は金甌無缺の國體は古今に通じてかはらないけれど、政治の實際制度法令公式の文書等に至るまですべて支那の制度法令を模楷とせられ漢文漢語を以て公式の文書を表記することゝなつたのである。かうして漢學者儒者といふものが國家統治の機關として須要缺くべからざるものであつたと共に、漢學儒學は苟くも朝政に携はる程のものは必ず、知らねばならなかつたことは今の代の法學の知識が官吏に須要であるのと性質も程度も似て居たのである。しかしながら、平安朝時代の中頃から故實舊例といふことが政治上重大な地位を占めるやうになつてからは、漢學儒學が從前程に有力でなくなつた。さうしてさやうなる勢が、鎌倉幕府が起つてから益々著しくなつて來た。それで、先に述べたやうに、治國の要道に資するといふやうな意味での儒學は鎌倉時代から段々衰へて、それが、支那中心の學問にうつりつゝあつた。それでもまだ、儒者といふものが、政治上の諮問機關たることは行はれ、わが國に於ける儒者そのものゝ本質は保たれてゐた。それ故に德川幕府の聘に應じた林道春なども後世いふ漢學者とは選を異にしてゐた。その事は佐藤誠實の日本教育史にこの人の事を說いて、

即位、改元、行幸、入朝の禮、及祭祀の典、外交の事を初めとして、總て國家の制度、漢家の故事に就て每に顧問を受けしに、其學和漢を貫穿して識らざる所なかりしかば、爲に著述する所多し。是れ當時儒者を用ゐし狀を見るに足れり。

と云つてゐるのでもわかる。當時の儒者といふものを用ゐたのはこの通りの

必要から起つたことであつて、これは道春にしてもその子春齋にしても同じである。即ちそれらの人々の學問はたゞの漢學ではなくて、わが國の史實、法制、典故に即した學であつたことは明白であつて、これらの人々の著述もその通りであつた。卽ちその頃は儒者は漢文漢籍を主とはしたが、それは方法的に必要なのであつて、その目的はわが國家の學であつた。それ故に春齋がその家塾に倭學科といふ一科を設けるといふ事をもした譯であつた。然るに、德川氏が朱子學といふもので以てわが國の綱常を維持しようと企てゝから、それらの儒學漢學が治國平天下の學から、個人の治心修身の學にうつり行く勢を生じた。これは程朱の學の性質が影響した點も少くないのである。しかも、それが、一旦國家天下に卽することを離れてしまふと、もとわが國に治國の要道として採用せられた本旨が忘れられて、支那本位の經學、史學、詩文を研究するを本旨として卽ち支那學の專攻者となり、崇拜者となり、わが國の事をすて、わが國を輕蔑するやうな風を段々に盛んにして來た。それも一時に遽かにさうなつたのではあるまいが、木下順庵の門人などに既にこの傾向が著しくなつてゐる點があり、萩生徂徠などの時代になつて、こゝに本邦の學は殆ど、絶緣した形になつてしまつた。それらの事實は儒學漢學の歷史を見るまでもなく、それらの學者の著述目錄を一瞥してもわかることである。かやうになつて來ると、古、聖天子が儒學を神皇の大道の羽翼として御採用になつた所の本旨が全く沒却せられてしまふ事になるのみならず、國家の學といふものが、この國に全然無くなつた有樣であり、學問といふものはすべて外國本位のものだけであるといふ狀態になつてしまつた事になる。この大局觀に立つわが國の敎學の歷史上の狀勢が國學を享保の頃に勃興せしめた原因であり、この大なる日本精神が冥々裡に大活動を起さしめた根抵である。かくの如くにして、この一大事實が荷田春滿の心にはたらいて形を生じたのが國學である。而してこの春滿の主張した學ははじめ倭學と云つてゐたらしいが、如何にも國學と云ふ名にふさはしいものであつたといふ事が出來るであらうが、それと同時に、虎關のいふ所の國學と精神に於いて一脈の生氣相通ずるものが存するのである。而してそれ故に春滿をして

先儒之無識無一及皇國之學。

と痛歎せしめたその事も事實であり、又

國學之不講實六百年。

と云つた意味もわかるのである。今この意味を以ていへば、平安朝以前の儒學は同時に國學であつたといはねばならぬのである。それは形に於いて今の國學とは違つてゐたとはいへ、精神に於いては明かに同じものであつた。さうでなければ「國學之不講實六百年」と春滿の叫んだことは無意味となる。かくして虎關のいふ所の國學も亦その精神が共通したものであらう。然らば、荷田春滿の唱へた國學と虎關のいふ所の國學と全然同一に見てよいかといふに、その精神は同じであつても、その學としての科目、研究法の上に於いては著しく違ふものであるから同じだといふことはもとより出來ない。春滿の時代に於いては既に新しい國學を生ずべき部分研究は到る所に新しい姿で起つてゐた。春滿はこの新しい着物をとつて研究の手段として、こゝに新時代に適當すべき新しい學としての形をとつて國學を復活せしめたのである。

以上述べた所で、國學の神髄がどこにあるかといふことはわかるであらうが、之を村田春海のいふ所の和學に照して見ると一層歴然たるものがある。春海のいふ和學の三科なるものは春滿のいふ所の學の範圍に入つてその外には出ないのである。しかしながら春海のいふ所は三の分科があるだけで、その統一點がどこにも示されてはゐない。春滿のいふ所は神皇の教として古來傳へられた道がその學の目ざす極致である。しかしそれはどこまでも學であるからして、その科目その研究の方法なり態度なりが考へられねばならぬ。こゝに於いて、春滿はその研究の出發點を言語におき、その各々の部門は目的たる古道古義を明かにする爲に、必要なる方面として見たもので、實はそれら各部門について種々に研究せられた上で、その本體たるものが明かにせられねばならぬとした、その本體を明かにするのが最後の目的である。その目的が「神皇之教」「古道」であるのであるが、春海の和學大概には之を忘れた如くにしてゐる。しかし、これは春海が忘れたものではない。春海は漢學を好み、古道を好まなかつたから、このやうにしたのである。これ卽ちわれ〳〵が春海を以て正系の國學者と認めない原由である。而して春海以前の學風を汲む學者、たとへば、谷川士清の如き

人はその業績とその研究範圍とは正系的國學者と目せらるゝ各大人と大差ない程の偉大な學者であるが、この人をもやはり正系的の國學者といはないのはどういふ譯かといふに、これは春滿の國學の系統に屬しないといふやうな單純な理由でなしに、その國學の中心骨子たるもの及び、その分科との關係についての認識が確立してゐなかつたと思はるゝからであらう。卽ちその語學、國史、法制、神道の諸々の研究が一の學として統一がついてゐない爲であると思はれる。しかしながら谷川の如き偉人は春海などを國學者といふよりは、確かにすぐれた國學者と云つて差支ない業績のある人である。

かやうに考へてくると、國學といふものはたゞ漫然とわが國の言語や、文藝や、歷史や、法制や、神道やを研究するだけのものではなく、それら各部門の研究對象が相關聯して居て、一の日本の精神の發現であると認め、その源たる精神卽ち古今を貫く精神を明かにせうとする唯一點がある。これが國學勃興以前の諸々の研究とこの國學との差異の眼目である。しかし、又この國學勃興以前の諸種の研究が國學の勃興に全く無關係であつともいはれない。それらの研究が部分的にもせよ、前に行はれてゐたからこそ、この國學も新しい姿であらはれることが出來たのである。唯爾前の學は個々別々で統一が無く、中心點の認識などはもとより未だ無かつたのであるが、春滿の提唱によつてこゝに魂が入つてすべて一の國學の分科として考へらるゝことになり、それと同時に活潑な活動を起したのである。その一の魂が國學の眞髓なのであるといはねばならぬ。

要するに近世起つたこの國學は上古以來の神皇の大道を明かにせうといふことを眼目としてゐるもので、その研究法としては言語の研究を基礎として古今を貫く國民的精神生活の原理卽ち古義を明かにするを本旨とするものであるが、その學としての研究法の新しいが如くに、それは單なる復古ではなくして段々に古義卽ち國民精神を闡明しつゝゆく進歩的の學問であることは國學そのものゝ歷史の明白に示す所である。

## 五

國學の目的や態度は上に述べた通りであり、さうしてそれが明治維新の有力

な原動力となつた事は既に說いたが、この精神が、今日に於いて果して活動してゐるであらうか。若しくはこの國學に將來の生命があるであらうか。

現代に於いて、この國學を觀じてゐる學者の說には「國學は今や眞淵や宣長に於ける如き古學の精神を失つて居る。維新の機運を將來に指導するものは到底國學である事が出來なくなつた。敎部省の廢止はこの意味に於いて國學の末路を語るものと見る事も出來る。固より日本研究は敎部省廢止の後と雖も一貫して繼續せられ、やがて今日に於ける隆盛を見るに至るのであるが、その性質に於いて、それはも早、國學として呼ばれる事は出來ないであらう。」(竹岡勝也氏、國學史概說)といふ如く見られてゐる。これは恐らくはこの著者だけの見解に止まらないので、似た樣な意見は多くの學者の胸中に懷かれてゐるのであらうと思ふ。若し、この意見が正しいとすれば、今日、國學などゝいふことをいふものははじめから時代後れの愚物であるといはれねばならぬであらう。私は斷じてさうは思はない。この國學が將來に必要がなくなつたといふことならば、それはその興起の目的が既に遂げられて、今後にその必要がなくなつたといふか、若しくは、その興起の目的が正鵠を失つてゐて、もはや、さやうなものゝ價値を誰人も認めなくなつたといふことであらう。我々は國學は國家之學として必然的の要求に應じて起つたもので、一時の熱にうかされて生じたやうな薄弱なものとは認めない。それ故にその必要が無くなつたといふ事は認めないのみならず、今日のやうに國家に對しての自覺反省の缺乏した時代に際しては一層その必要であることを認める。この故に將來はます〳〵必要にもなり、盛んにもならねばならぬものと思ふのである。竹岡氏の國學の興起に關しての觀察は歷史上の事實だけの上からの觀察としては不當とはいはないが、その源が日本民族精神の已むにやまれぬ要求として勃興した、その根本を論じては居ない。比較的にすぐれた國學史の觀察がこの狀態である。その他のものは推して知るべしであるが、凡そ歷史上に見ゆるあらゆる事柄はこの根本の精神の起す一の現象たるに止まるものである。この根本の精神の滅びない限り、それは一時壓迫せられて衰退の姿を呈してもいつかはもとにかへるものである。

この國學といふものは、大日本國特有の學問であつて、世界中どこをさがして

も類例の無い學問である。かく世界に類例が無いといふ事が明治以後、わが國學をして神社と共に瀕死の狀態に陷らしめた最大の原因である。しかしながら、世界に類の無いといふ事を理由にして、それを侮り、それを壓迫しなければならぬのであらうか。わが國の如く世界無比の國家に於いては、又世界無比の國學といふ學問の生じたのも偶然ではないのである。然るに、近頃またこの國學を西洋の文獻學に同じだと唱へてこれを日本文獻學などゝいはうとするやうな說を生じた。私はまたこの點について少しく論じて見よう。

文獻學といふ語は、フィロロギーといふ獨逸語の飜譯である。これは元來西洋諸國で、希臘、羅馬の古代の文化をば、その時代の文獻、その時代の言語を基礎として研究することを目的とした學問である。かやうな學問の起つたのは歐羅巴の文化は近代の諸國といへども、皆希臘、羅馬の流を汲んでゐる爲に、その源を知らうといふわけで發達したものであるといはれる。さうして後には、希臘、羅馬のみならず、英國とか、佛國とか、獨逸とかいふやうな、それ〴〵古代文化を有してゐる國々では、それらの國々の古代文化を知る爲に、それ〴〵の文獻學といふものが起つたのであるが、それらの文獻學がちやうど、わが國學の行つて來た處に似てゐるから、國學は即ち文獻學であるといふ事を唱へることが起つて來た。然らばわれ〳〵は古臭い國學をすてゝ西洋の臭氣の高い文獻學にうつるべきであらうか。

西洋では、近世の科學がだん〳〵盛んになつて來て、法律、政治、歷史、言語、文藝、美術といふ樣にそれ〴〵の專門の學者があらはれ、それ〴〵の分科を深く研究することになれば、文獻學などいふものが無くてもすむといふ考へがだん〳〵生じ、文獻學などゝいふ學問が果して必要であるか、又そのやうな學問が果して成立ちゆくかと疑はれ出して來たさうだが、アゥグスト・ベエクといふ文獻學者が出て來て、その文獻學は昔の人が意識して居つた事をその通りに再びわれ〳〵が認識することを目的とする學問であると說いてから、また文獻學がその存在の價値を確認せられたといふのである。このベエクの文獻學と國學とが殆ど、同樣であるといふことを說いたのが芳賀矢一博士であつた。（國學院雜誌第十卷第一、二）その說く所によれば、その目的も方法も全く同じである樣に說かれて

ある。若し、この說の如くであれば、國學は文獻學であると云つてもよい事になるので現にその眞似をしてゐる人もある。

抑も、明治維新以後、西洋崇拜の風が俗をなし、加之、いろ〳〵の西洋風の學科が流入して來て、國學の諸々の分科を分割し去つて、國學といふものは全く無用の長物であり、又舊來の陋習の見本の如くに、考へられて來て、また顧みる人もなかつた時に、このベエクの文獻學と國學と同じ樣なもので、西洋にも既に一科の學問として存在するといふことをいはれた時に、今まで國學を輕蔑したものも西洋に在る以上は輕蔑も出來ないかも知らぬ位に考へたらしい。しかし、その當時はたゞそれまでの事であつたやうだが、その後、世の有樣がやう〳〵かはつてくるにつれてこの國學といふものについて多少の注意を加へることにもなつたらしい。そこで、近頃の學者は多少これを考へることになつたとはいふものの、なるべく國學といふ名目を避けて、文獻學といふ語を用ゐることに努めて居る。或は又文獻學といふことをも避けて國民科學とか、日本學などいふ事を唱ふる人もある。これらの人々の意識の底流にはやはり國學といふものを卑しんで、西洋流の物のいひ方をすることを有難がつてゐる所の事大的西洋崇拜思想が横だはつてゐると私は診察する。

上の如くにベエク一流の文獻學が國學と殆ど同じであるといふ事は芳賀矢一博士が說き、その他の學者も略々同じやうに認めてゐるらしいが果してさうであらうか。先づ文獻學といふ名目を考へてみると、これは何を目的としてゐるのであるかは名目だけでは分らぬ。古語を研究の基礎として、古い文獻を研究するといふ事が最終の目的であるならば、わが國學と全然同じであるとはいはれない。國學が古語を研究し、古代の文獻を研究することは文獻學に同じいとしても、目的はその古語や文獻やにあるのではなくしてわが國の道を知らうとする所にある。それ故に文獻の研究はいはゞ手段であつて、目的ではない。凡そ學問に名づけるには、その研究の手段を以て名づける事が妥當なのであるか、その研究の目的を以て名づけるのが妥當なのであるかといふことを一般的に考へてみるがよい。尤も文獻學といふ名目に似た名をもつてゐる學問も無いではない。例へば解剖學といふものがそれである。これは解剖學の名のや

うに、解剖するのが唯一のしわざであるけれども、解剖その事を目的とするものではなくて、解剖を手段として、人體の構造を研究する學問である。かやうな例もあるからして、文獻學といふ名目も全然いけないとはいはれないが、目的を明かにせず、手段を以て名づけたもので、何等適切な名目ではない。國學といふ語は、明白に目的を示してゐるもので、しかも、これが古から活潑に研究せられて來てゐるのであつて、文獻學といふやうな曖昧な名目にまさること萬々である。何を苦しんで、今更、この歴史ある、貴い名目をすてゝ、この明確なる意味をもつてゐる名目をすてゝ、彼れの曖昧な、さうしてわれ〳〵に何の親しみも無いものを頂戴するのであらうか。私はその心を怪しむのである。

文獻學の名は手段に即して名づけたものである。それ故に、これが不十分なことはいふまでもない。それで、この學問は古代學或は古學ともいはれたものである。この方がその目的と性質とを明かにした點で、文獻學といふよりはまさつてゐるかも知れぬ。而してこの古學といふ名目は本邦に於いても荷田春滿が既に唱へ、又一般に國學者もその學を古學と認めたからして、この點に於いて、彼國の所謂文獻學と性質を全然同じくするものであるかの如くにも見ゆる。しかし、それは果して間違の無い事であらうか。わが國學はたゞ古代の事を知るといふのが目的ではないのである。その古代の事を知るといふものも亦一の手段であつて神皇之教を知り古道を明かにせうとするのが目的であり、それによつて、古道の復興に資せようとするのであつた。それ故に、この國學の目的は結局は古道の復興といふ所にまで及ぶべきものであつて、それが天皇親政の政體の復興を導いて、明治維新を誘發したのである。こゝに我々の國學といふものが、たゞ古代の事實をありのまゝに知ればよいといふやうな事が目的でない事が知らるゝのである。さうしてわれ〳〵は西洋の文獻學がかくまで活力に富んでゐるものとは知らないのみならず、古道を復興せうといふやうな目的があるかどうかを知らない。なほ又それだけでなく、わが國學の古道を復興せうとした、その目的は「神皇之教」の中頃衰へたのを復活せうとしたのである。而して、これがたゞ古代のまゝの姿にかへらうとしたのではなくして、古今を貫いて存する神皇の大道を知らうといふのが目的であつた。それ故に、古道を明

かにすると共に新たな時代を指導する燈明臺にもなつたのである。まことにこの學は谷川士清が考へたやうに道德を明かにするといふ一の點がある。その道德も、個人の道德といふやうな、けち臭いものではなくして神皇の大道である。本居宣長がいふ所の道を明かにするといふのもこの精神によつて云つたのである。この道は過去の史跡を正しくたどることと現在の姿を正しく理解することとによつて明められ、而して將來の理想を照す照明ともなるものである。しかし、西洋の文獻學が果してこれだけの根本思想をもつてゐるのであらうか。私はベエクなどの根本思想を知らないから、今それを論ずることが出來ないが、わが國學には上述の如くに一の大なる信念が底に横だはつてゐる。このやうな信念がこの國學を興したものである。手段方法が似たからと云つて、わが國學は文獻學に同じいとはいはれない。國學といふ語には「神皇之敎」を明かにせうとする「皇國之學」といふ精神が十分にあらはれてゐる。文獻學が假りに國學にその目的、方法が全然一致したやうに見えるとしても、その文獻學といふ語と國學といふ語との意味の違は言語と國語といふやうな違があるのである。國學が文獻學に似てゐるとしても、それはたゞの文獻學ではなくして「わが國の文獻學」である。國學を文獻學であるといふことは、その手段とか性質とかの說明としては役に立つかも知れないが、それにはわが國といふ嚴密な制限がある筈である。然るにその制限を示す所の「わが國」が世界無比の國體を有してゐるものであつて、西洋諸國のこれまで夢想もなし得なかつたやうな崇高な事實が多々このわが國には存するのである。それらの特異な事實の眞相なり、道理なり、精神なりを明確にすることが國學の特色となるべきものである。それゆゑに國學は又わが大御國の世界に比類なく貴い所以を研究する學問であるといはれるのである。隨つて國學はやはりどこまでも國學であつて、たゞの文獻學ではないのである。

以上述べた如くに、國學はわが國體が世界無比であるが如く、亦世界に比類の無い學問である。この國學の眞髓は私が「大日本國體概論」の劈頭に、

國體の宣明は國學の第一要義なり。

と叫んだやうに、この國體の事實なり、道理なり、精神なりを明かにするにあるこ

とは、斷じて疑ふべきことでない。かやうな精神が、かれら西洋人の說く文獻學といふものに存するであらうか。私はこれを知らぬ。國學の第一要義がこの國體の宣明にあつたからこそ、明治維新の原動力の中の主要なものとこの國學がなり得たのである。たゞ古代の文化にあこがるゝといふことがこの國學の本旨ではない。神皇の道がわが國家の根基である。この神皇の大道が明かになれば、人心も振起するのが當然であるのではないか。かやうに考へてくれば國學が文獻學に成りさがることはこの精神を失つて形骸だけを止めることになる譯であつて、それは同時にわが國體が特異のものであるといふ意識を棄てることにもなるのである。而して又國學が將來に永續せぬといふ考はわが國家の特異性を研究する必要がなくなるといふことで、言ひ換へれば、わが國家が將來に永續せぬことになる原因をつくるやうなものである。實に明治以來の國學の侮辱輕蔑は國體の研究をなすものを侮辱輕蔑する所以であつて、自分などは明かにこの侮辱を蒙つた經驗をもつてゐる。或る時には政府と社會とがかくの如き目的を有して立つた學會を潰さうとした事もあつた。私はその會の一員としてこの事を公言する責任を感ずる。而してこの侮辱輕蔑はやがて、かの赤化運動などの培養基となつたものであつて、思想惡化の責任はこの國學侮辱の徒に大半を歸せしむべきものである。

## 六

以上、私は國學の外廓的の事を述べて來た。こゝにはわれ〳〵が考へてゐる所の國學の目的と手段とを簡單ながら說かねばならぬと考へる。

國學の目的はわが大日本國を正當に理解するにある。この大日本國を正當に理解するといふことは先づ國家組織の要素から考へると、

天皇　國民　國土

の三に分けて觀察し、更に之を一括して、

國家　國體

としてみなければならぬ。そこでそれらの觀察の方面の差によつてそれ〳〵の學科が必要となるのである。しかし、いづれについても、わが國家といふ意識

を忘れては決して國學とはいはれない。しかして、この國家といふものは精神によつて組織せられてゐるものでもあり、又一の文化現象でもあるからして、これらの點にその研究の主要點をおかねばならぬものである。しかも、それらを根本的に理解せうとするには、その精神を傳へ、文化を傳へてゐる所の文獻なり、言語なりを正當に理解せねばならぬ。さうして、その文獻がまた言語文字を第一の條件とするものであるからし、て國語を正當に理解することがこの學問の研究の基礎になるのである。この事は荷田春滿が既に極言してゐるのであつて、次々の國學者が皆これに力をこめて來た。かくして、我々はわが文化のあらゆる事象について正當な認識をもたねばならぬ。これについては現在眼前に存する事象についての正しい見解を得ると共に、深くそれの史的經過を洞察せねばならぬ。こゝに於いて國史の正當な認識が著しい重要性を帶びて來る。國學は上述の如き目的を有する爲に、その行ふ所は多端である。卽ちわが國の文化のあらゆる方面に亙つて、その正當な認識を要求するものである。かくの如く考へてくると、國學は果して古學であるか否かといふ問題を生じて來る。

こゝに上にあげた倭學といふ名目を考へてくると、これは古の事のみを研究するものといふことが出來ない。神道の學も古の神道だけを研究する學問とはいはれない。歌學も亦古の歌や文章や語だけを研究する學問とはいはれない。更に虎關の國學者藝術也と云つた國學は、國家の法制禮儀の學を云つたもので、古の事だけを研究するものとはいはれない。然らば荷田春滿の古學といふのは如何なる意味であらうか。それとこれとは矛盾するのでなからうか。ここに私はも一度かの創國學校啓を顧みる必要をみる。春滿のいふ所の古學は「復古之學」の意であつた。復古を目的とした學であつた。何が故に「復古」と云つたかと考ふるに、彼はわが神皇之敎が陵夷すること玆に六百年、その天皇親政敬神崇祖の大道の衰へを復興せうといふ事にあつた。卽ちわが國家の本來の面目を復活せしめようといふ事にあつた。卽ち古道古義を知らうとするのも亦これ一の手段であつて、その目的は神皇之敎を明かにする所にあつた。神皇之敎は皇國の古今を通じて存する道で、千古不磨の大道である。これが卽ち所謂古道である。それ故に復古といふ事はその當時の必要に應じて唱へた一時

的の語で、當時、これが、第一の急務であつたからこれを强調したのであつた。國學の眞の目的は單なる復古にあるのでなくて、古來からの「神皇之敎」を明かにするにあるのである。かやうに考へて來ると、明治維新で國學の目的を達したといふのはその應急策として唱へた復古だけの事を云つたのであるといふ事がわかるであらう。國學が今後不要であるといふことは今後「神皇之敎」即ち國家の恒常的精神が不要であるといふことに歸着するのである。然るにわが「神皇之敎」といふものは、わが國民道德、わが國體の源をさすのであるから、これが今後不要であるなどゝは夢にも思はれぬ譯である。こゝに於いて國學は古代に憧るゝのが目的ではなくして神皇之道に照して現代を如何に指導するかといふ事がその目的の主要なる部分として存するものであることは明白である。明治維新の原動力となつたのは明かにその時代の指導を國學が爲したのである。隨つて、國學といふ學問は國家の法制などまでにもその指導原理を示すべきものである。荷田春滿のいふ所の格律の學といふものは今日いふ如き古代法制の意味ではない。大寶の律令以下格式の類は實地に行はれた部分が、當時少かつたことは事實ではあるが、しかも、道理上は明治維新の時まで朝廷の正しい現行法制であつたのである。かやうに考へて見ると、今日、國學者といはるゝものが、たゞ古代の事だけを說いて、現代について何等の指導をもなし得ないのは國學の本旨を忘れてゐるのであるといはねばならぬ。國學の本旨は、古事記の所謂序にいふ如く「古を稽へて、今を照す」といふ所にあるのである。これを忘れはてゝ今を照すことをなし得なかつた國學が時代から置き去りにせられたのはやはり當然であつたといはねばならぬ。

かやうに論じてくると、然らば、古代の事など、論ずる必要がないではないかといふ反對說も出て來るかも知れぬ。しかし、これは一を知つて二を知らぬ論である。われ〳〵の今日あるはたゞ今日だけの問題ではない。祖先代々のあらゆる文化の集積の結果である。今を照すには必ず古を稽へねばならぬことは人事萬般みな然りである。文獻も口碑も、一切無い國なら致し方無いが、苟もその由來の知らるゝ以上、よくその由來とその道理と、その精神とを知らなければ、あらゆる社會萬般の文化、人事の本意を知りうべきものでない。その本意を知

らねば、之を正しく認識し、正しく處置し得べきものでない。こゝに於いて、古代の事を委しく知るといふことが、深い〳〵必要性をもつてくることがわかる。かやうな精神からしてわれ〳〵は古代の文獻特に古典といふものを最も重いものとして尊重するのであり、これを正當に認識せうとするのであつて、國學の研究上の主力をこの古典に注ぐ理由もこゝにある。今こゝに古典とは何ぞやといふことを述べてゐる餘裕もないからそれは略するが、この古典に於いて最もよくわが國家、民族の恒常的精神があらはれてゐるから、これの研究が國學の學問的研究の中心となるのである。

國學は國家の組織の要素の研究に先づ着眼せねばならぬことは既に述べた所であるが、茲にそれらについて、なほ少しく述べてみよう。先づ此の點では天皇皇室についての正當なる認識を有せねばならぬ。これについては一面わが國家組織についての正當なる認識を必要とし、又一面皇室に關しての正當なる認識を必要とする。その國家組織についての正當なる認識をなすが爲には國學はわが帝國憲法について、ことにその國體に關係ある點について、その由來、その道理に至るまでも深い洞察を加へねばならず、又皇室に對しての正當なる認識も皇室典範を主としてその他典禮制度に至るまでもその由來道理について深い洞察を加へねばならぬ。かくて又國民の生活の上に目を移せば、その國民の性情、及び國民的文化等について研究すべき方面は多端である。斯くの如くにして、國學はわが國のあらゆる文化に亙つて正當なる認識と洞察とを要求するものである。かく、その研究すべき方面は多端であるが、しかし、その眼目はただ一の國體の宣明に歸するものである。この國體といふものは天皇國民國土が一體となつてゐる實體である。而してこの國體を維持し、永遠に生命あらしめるものは所謂古今を貫く一の道である。この道が神道といふ形をとり、國民精神といふ形をとり、國民道德といふ形をとつて現はるゝものである。古來の國學者の心身をなげうつて、研究して來たのは結局この一の道を明かにする爲であつた。

さて國學は上のやうな目的を有するが故に、その研究の手段としては萬般にわたつて知らねばならぬやうな姿である。一の語を明かにするのも、一の藝術

をしらべるのも、一の古物を鑑査するのも皆この目的の一部としてはたらくものであるから、その本旨を忘れてはならず、又それを小局部に限られたものとして自ら輕んずべきでない。國學はかやうに種々の分科を有しうるであらうが、しかし、それらの分科はどこまでも分科そのものであつて、國學それ自身ではない。それは、たとへば、手足は吾人の身體の缺くべからぬ部分ではあるが、それは吾人の外にあるものではないし、又吾人それ自體でもないと同樣である。國學はそれらの分科を必要とし、それらの分科を有するによつて、目的を達するものであるけれども、それらの總和が直ちに國學そのものではない。その横に各各の分科を貫き縱に古今を貫いて通つてゐる所の一の道、一の精神を明かにせうとするのが國學の精神であり、目的である。國學とその分科との關係は、諸々の科學と哲學との關係に比べて考へることが出來る。諸々の科學に對して、その原理の統一としての哲學が存するが如く、わが國家、わが民族、わが文化の多くの分科的學術的研究に對してその原理の統一としての研究たる國學といふものが存するものである。而して、その研究の結果が過去に於いて明治維新といふ一大事實を誘導する原動力を起すことになつた。將來に於いて、わが國家を興隆に導く指導原理も亦國學にまたねばならぬものであらうと信ずる。

以上論ずる所を以て略〻私のいはうとした點を述べたのであるが、讀者は、私のいふ所を以て著しく主觀的に傾いたもので、學問といふに躊躇せねばならぬものでないかといふ懸念を生ずるかも知れぬ。しかし、私は少しもさやうな懸念もなく、又あらかじめ答を豫想するやうな研究態度も考へたことはない。我は正當にあるがまゝに、わが國語、わが國史、わが民族の行動、わが文化等を觀察し認識すべきである。その時に正邪善惡はあるがまゝに我々の心にうつるのである。わが國が神皇の大道の顯現である以上、必ず合理的正直であつて、一毫もごまかしをゆるさぬであらう。われ〳〵の國學の研究が一毫でも爲にする所があつて、良心を曲げるやうな態度をとつたならば、正直を本旨とする神皇の大道はかへつて、これが爲にゆがめられるといふことになるであらう。それ故に私は研究の態度としては、あるがまゝに、すなほな心で研究を施すべきで、よき事はよいとし、あしき事はあしいとしてすゝまねばならぬものと確信する。

この學術的研究の上に、是を是とし、非を非として、一毫も蔽ひかくすことがないといふのが、國學者の研究態度である。この態度は師の說でも、よくない說ならば盲從するに及ばないといふ態度と精神に於いて共通するものである。これは一にわが國民性の明朗にして、やましい事を嫌ふ精神に基づくものである。朝鮮や、支那の歷史が往々曲筆するのとは著しい相違である。かくの如くにして、わが國學は眞實といふ事に立脚してゐるのである。尤も、この研究態度は國學者のみならず、眞にわが日本精神を體してゐる人々の等しく行ふ所である。北畠親房の神皇正統記の記事評論などの齒に衣を着せぬさまを見よ。五のがある。特に三種の神器についての記事は實に正直で、有のまゝに記載して少しも憚る所が無いのであるが、これはこの三種の神器がわが國體の上に最も重しも憚る所が無いのであるが、これはこの　三種の神器がわが國體の上に最も著しい關係があるものであるから、これの記事の上に一毫でもごまかしがあれば、國體がそれだけごまかしのものとなるおそれがあるからである。又水戸義公が編纂した大日本史の如きは直筆して毫も憚らない。かやうに直筆して毫も憚らないからこそ亂臣賊子をして膽をひやさせるのである。更に又、大日本史の神髓を穿つたと評してもよいと我々が感奮する所の栗山潛鋒の保建大記を見よ。その講を聽く人にして、若し、寸毫の邪心が內に萠してゐるならば到底席に堪へられない程の嚴正なる批判を下してゐるではないか。國學者のいふ所のあけすけであるといふことはその淸き明き心にうつゝたまゝをそのまゝいふからである。國學者の研究態度はまさに上の如きものである。曲筆したり、舞文したりするのはそれは支那人などの昔、したかも知れない事である。國學者の言說を國の爲に筆を曲ぐるかの如くに考へてゐる人間は、自分が、何かの爲に筆を曲げかねない人間の思ふ事で畢竟、自を以て他をはかる事に基づくものである。

要するに、近世興つた國學は上古以來の神皇の大道を明かにせうといふことを眼目としてゐるもので、その研究の基礎を國語と古典とにおくものであつてその研究法としては言語の研究を基礎として立ち、又國史を研究して古代より今日までの文化を洞察し、それらを基として、法制、神道等の研究に入り、以てわが

國家の特性本質をさぐり、而して、古今を貫く國民的精神生活の原理即ち古義を明かにし、その古今を貫いて存する一貫の道をあるがまゝに認識し、明かにすることを目的とする。これはその學としての方法の新しいが如くに、それは單なる復古ではなくして段々に、古義即ち國民精神を闡明しつゝ行く進歩的の學問である。即ちこの學問は顧みては古道古義を明かにしつゝ、進みては國家の前途を照しつゝ行く進歩的の學問であることは、國學そのものゝ歴史の明かに示す所である。

國學は以上の如き學問であるが故に、これはその研究の手段としては之を知るといふ事にはじまるのであるが、それは、たゞの知識に止まらず、わが國家の魂に觸れようとする事を目的とするものである。さうしてこの魂にふれ、それをつかんだものは、まさしく國民の先頭に立ち、國家の針路を指導する大任を帶びなければならぬものであらう。

七

國學の神髄は上述の如きものである。しかし、ものゝ神髄といふものは、とかく忘れられがちなものであるが國學にもこの弊がつきまとひ、その神髄も往々忘れられ易い。一體にこの學問の研究は荷田春滿が、古語から古義をさぐり古道を知ると考へたやうに、言語の研究を最初の手段として、その言語の示す事實の眞義を考證し、それより進んでその精神を知らうとするものであるからして、大體次の如き三段の順序

言語→考證→精神(道)

を經てその目的地に到達するものである。然るにその神髄を忘れたものは往往その途中で止まつてしまふ。その最も淺薄なものは國學の研究の最初に必ず通過せねばならぬ言語の研究で止まつてしまつてゐるものである。これが明治以後の國學者の多くが國語學者として認められた理由であるが、國語學を知らない國學者といふものがある道理の無いものであるが、國語學者即ち國學者ではないのである。國語學者が國學者であるといふのは、人間の腕や脚が人間であるといふやうな話である。さて、ここで、私が自分の事を申してはすまぬ

のであるが、物の譬に申してみる方がわかり易いから姑くその無禮をゆるされたい。私は畢世の目的として、明治維新以後瀕死の狀態に陷らしめられた國學の復興をはかることを心がけて來たのであるが、それが爲には先づ國語の學問の復活から着手せねばならぬと考へて一時之に沒頭した。それが爲に私を國語學者だと認めてゐる人もあるやうであるし、又私が國學を唱へてゐることを變節であるかの如く、墮落であるかの如く考へて或は冷笑し、或は嘲罵し、或は匿名の手紙で、詰問か忠告かをする人もある。その忠告者の志は諒として感謝するけれども、國學の復興は私の初志であり、國語學もその爲に努力したので變節でも何でもないのである。私はこゝに明言する、國語學を正しくやらない國學は砂上の樓閣に等しいものである。荷田春滿の云つたやうに、古語の研究に於いて人後に落ちない程の學識が無ければ古道の研究に於いて神髓をつかみうる見込が無いのである。この頃の國體論者、國民精神論者の多くは失禮ながら私は賛同し得ないのである。それは何故かといふに、その國語に對する認識が正しくないからである。即ち勝手次第の語釋をたてゝそれをふりまはして自家の說の證據としようとしてゐるからである。この點から見ると、この頃の所謂日本思想家のいふ所の古語の說明は契沖や春滿以前の神道家の語釋とその性質の似通つたものであつて、純正なる國語學から見れば、賛同しかねるものが甚だ少なからぬ。この點から見れば、まさしく百鬼夜行の姿である。純正の國學はこの百鬼夜行の姿と混同せらるべきものではない。これはまさしく春滿の所謂無證不稽の私言と同じものである。國語學で止まつて進むことを知らぬは不可ではあるが道に害が無い。基礎の無い砂上樓閣的の言論は百害あつて一利もないかも知れない。かやうな事になつたのも國學を輕蔑してゐるからである。

言語の學を通過して一歩前進すれば、前に述べたやうに考證の學になるのであるが、これも國學の精神を忘れたものはこの考證に止まつてしまふ。即ちこれは吉田令世の聲文私言に言つたやうに「おのづから考證の學に墮落して」ゐるものである。こゝでも私の事を申してはすまない事だが、かつて大槻文彥博士が私に向つて、「お前は考證がうまい」といはれた事もあつたが、私は實は考證學者

として認めらるゝことを屑しとしないので、その際返事に窮してしまつたことがあつたが、明治維新以後の國學者はよく進んだものでも多くはこゝに止まり、しかもそれで安住してゐたやうである。考證はその事實の眞實をつきとめることである。この事實の眞實をつきとめるといふことは古道、古義を知る上には甚だ大切な事で、眞實の事實を知らないでは、その意義とか精神とかを明かにしたくても何も出來ないものである。しかし、たゞ事實そのまゝに知つたとて、それで、能事了れりとすることは出來ない。明治時代の學者は多くはこの域に到つて滿足してゐた。しかしながら、有職にしても故實にしても、それ相應に精神が在つて行はれてゐる筈である。故實をやかましくいひながら、精神をいはないのはやはりその域に到らないからでなからうか。たとへば、奈良朝時代からの元日の朝賀の禮と歷代行はれた御卽位の禮とは規模の大小はあつても、全然同じ式である。これには一貫の理由、共通の精神が存するのである。然るに、この理由、この精神が共通してゐるといふことが卽ち神皇の大道のあらはれであるにかゝはらず、古來の故實有職の學者が之を說かないのは果してそれでよいのであるか。もとよりこれも、かの勝手次第な語釋をするやうに勝手次第な說明をせられても困るが、これも學問上當然わかることが少くないのであるからそれを明かにせねば古義古道は決して知らるべくもないのである。

以上私は國學者が陷り易い弊風と、國學を學ばないで、國學者風の言論をなすものゝ間に行はるゝ弊風を說いたが、國學者として何から何まで知り盡して居る譯のものではない。それ故に國學者として解決し得ない事柄が少くないのである。又さやうに解決し得ない事柄が多くあればこそ、この學問が世に存するのである。すべてが明かに知り盡されてゐるならば何も國學などいふことをいふ必要もない譯である。然らば國學者はそのわからぬ事に對してどういふ態度をとるかといふ事である。國學者としてはわからぬことはこれを明かにするやうに十分の努力をなすべきこと勿論であるが、どうしてもその時の學問の力でわからぬものはそれを疑のまゝ後世に傳へて後賢の研究をまたねばならぬ。わからぬからと云つて、道理にもあはぬ事を以て橫議曲論してはならぬ。學者が良心的にわかつたと思つた事にも後人の進んだ時代の學問に照す

と、それが誤りであつた事が知らるゝといふ事も少くないのである。況んや、自己の良心に於いて是認もせぬことを公言して自ら欺き、人を誤るが如きことは學者の屑しとせぬ所である。それ故に國學者は、多く、その思慮にあまれる事を神慮に歸した。これは決して迷信の結果ではない。凡慮及び難いが、定めて、深い仔細のある事であらうが、いづれは神意によつてわかる事があらうといふ敬虔の態度から出た言である。今の人は何でもわかるといふやうな傲慢な態度に出る。これが身をも人をも誤る原因である。

## 八

國學は上に述べた通りの學問である。この學問は明治維新の當時はまだ國學者の活動が盛んであつたが、その後間もなく洋化主義全盛の時代になつて國學といふものが、全然國家から亡びよがしに取扱はれ、國學者も亦多くは自暴自棄して語學か考證かを以てその事業としたやうである。こゝに於いて自他共に國學を以て語學か考證かの學問と認めるといふ風になつた。そこで準官撰ともいふべき古事類苑さへも國學といふ名目を認めないで、「和學」といひ、その和學をば、「我國書を講究する學問の謂にして中世以來漢學に對して稱する所なり」など云つてゐる。而して、このやうに國學といふものを輕侮し無視して來る事こゝに四五十年、その結果現代の世相を導いたものである。

この國學は果して將來の無いものであらうか、又この國學は何等世相と關係の無いものであらうか。國學に將來の無いものだとは思はれない事は既に述べた。又國學が何等世相と關係の無いものとは考へられぬ。國學の侮蔑無視が國體を輕視する世相と相表裏してゐるものである以上、この國學が世相と非常に深い關係があること明かである。德川幕府の中頃からの國民精神の復活が國學となり、以て、明治維新といふ世相の一大變革を導いたのであり、明治維新以後の國學輕侮が國體明徵運動を起さなければならぬ程の世相を導いたものであることを知つてくれば、この國學の盛衰はやがて世相の上に重大な影響を與へて來たことは確かである。

惟ふに、國學の本旨は神皇の大道を明徵にすることにある。然らば、この國學

はわが國の教學の本義を確かに示さうとする學問である。昨年教學刷新評議會が文部大臣の諮問に應じて提出した答申に、

我カ教學ハ源ヲ國體ニ發シ、日本精神ヲ以テ核心トナシ、コレヲ基トシテ世局ノ進運ニ膺リ、人文ノ發達ニ隨ヒ、生々不息ノ發展ヲ遂ゲ、皇運隆昌ノタメニ竭スヲソノ本義トス

と云つたが、これ卽ち古來の國學の目ざす所である。又その答申の中に、

我カ國ニ於テハ祭祀ト政治ト教學トハ、ソノ根本ニ於テ一體不可分ニシテ三者相離レザルヲ以テ本旨トス

とも云つた。これも亦國學の古來明かにして來た所である。更に又本年三月文部省が公にした國體の本義に說く所は、古來の國學者が述べ來た所の國體の眞義、神皇の教に基づいて、敷衍したと見ても不可なる所を知らぬものである。こゝに於いて國學は事實上現代に復活したと見るべきものである。

今、この時に當つて徐ろに明治維新以後の國學のあはれな有樣を顧みれば、まことに隔世の感がある。明治維新後近頃までの國學はまことに言語につきての空理を說き、古事につきての煩瑣な事實を述べた死學の如くに見られ、國家の進運とは無關係の如くに思はれて來た。これは、國學そのものゝ罪ではなくして、それを學ぶ學者と社會國家との罪であつた。しかしながら、眞の國學者は國家の本質と特性とを明かにして、直ちに國家の魂に觸れ、國家の進運に對して指針を示すものでなくてはならぬ。隨つてこの學問はその研究の態度は極めて公明であると共に極めて進步的のものであつて、決して固陋の學問ではないのである。

なほ又この學問は排他的のものではなくして、極めて包容力に富んだものである。これについてなほ一言すべきことがある。賀茂眞淵から本居宣長に至る間にはその學問はことにやかましく漢心（からこころ）といふものを排斥した。又平田篤胤に至つては更に進んで佛教をも極力排斥した。これらは神道の純潔を學ぶ精神に基づく點もあるが、それら漢心、佛心を排斥しなければ、日本心の眞相が發揮しないからである。我々はこの漢心佛心を排斥して純眞なる日本心に復歸せうといふ精神には同樣に共鳴する。しかしながら、これを以て漫りに外國文

化を排斥せよといふのではない。この學の祖なる荷田春滿は

ふみわけよ大和にはあらぬから鳥の跡をみるのみ人の道かは

と云つて「から鳥の跡」(即ち漢字漢文)を專らとする人を諫めたが、それをよむなとはいはなかつた。春葉集の序にこの人の教へを記してある語に

皇御國のふみ見む人はまつからぶみを讀みて事をわきまへ、時雨ふる楢の林にわけ入り(萬葉集をよむこと)神代の宮木ひき(神典をよむこと)千代の古道跡をとめつゝますらを心をおふしたてゝ、高き代をしたはゞなどか昔の手振にいたらざるべき。

とある。即ち先づ漢文を學ばずんば、わか國の古典が讀み解く事が出來ぬといふことを教へてゐるのである。本居宣長はあのやうに漢心を排斥したけれども自身は漢學に相當の造詣を有してゐた。平田篤胤は佛教をいたく排斥したけれど自身は參禪もしたし、大藏經に精通してゐた。それ故にこの學問は決してひとりよがりの排他的のものではないので極めて包容力に富んだ學問である。即ち他の長を採りわが短を補ふといふのがこの學問の態度の一面である。

しかし、これは、その態度をとるその奥に一の根本があることを忘れてはならぬ。その根本精神を固く持すると共に、ひろく諸々の學問を學び以て限界をひろくし識見を高めなければならぬ。本居宣長、平田篤胤の例がその模範である。しかし、現代に於いては本居、平田のまねをしただけでは何にもならぬ。現代に於いては和漢洋すべての學に目をつけなければならぬ。ことに、德川時代には未だ無かつた所の

言語學　心理學　論理學　倫理學　美學　哲學　史學　社會學　人類學
法學　經濟學

等に學ぶ所が無くてはならず、さうしてそれらの長を採る必要がある。

研究の方法は、言語と事實とによるべきものであるが、その事實を正當に理解する爲には言語の正當な會得と歷史の正當な理解とによらなければならぬ。これらを離れては空論になる。空論は學問ではない。

以上のやうに目的なり方法なりを說いたが、これが、一般教育と如何なる關係

を有するかといふに、既に述べた如く、國學の本旨としてゐるのは神皇之敎の闡明であり、古今を貫いた國民精神の把握にあるのであるからして、これは國民敎育の根本となるべきものである。

わが國の敎學の根本義は要するに國學によつて明かにせらるべきものである。もとよりこの神皇之敎は時世に卽して時々刻々に宜しきを制して行はるべきもので精神は古今を通じて一であるけれども、一定の形に固着すべきものではないからして、これを固着のものと考ふることは神皇之敎をけがすことになるのである。又この國體も時々刻々に進展してやまない筈のものであるから、その本質は古今を通じてかはらないけれど、そのあらはれてくる場合々々は千變萬化これ亦一定のものではない。かくの如くであるから國學も亦固定的の學問でなく時世の進運につれ、若しくは時世の進運を導く爲に寸時も固着することをゆるさないものである。かくの如く生々發展することが神皇の大道の姿であり、その生々發展に相應じて展開し行くのが國學の本性である。かくして、この國學は生々展開止まる所を知らぬと共に敎育の上に常に大きな力を以て働きかけて以てその指針となるべきものである。

今、國學の歷史を瞥見してみてもその事が明かに見らるゝ。國學の勃興は元來國民の精神的の要求に基づいて起つたものだからして國民がその勃興した國學につれられて進んで行くのは當然であるが、德川時代の中期以後はその贊同者はもとより反對論者も知らず識らず、その感化を受けて來た。かくして、それが明治維新の原動力の最も有力なるものとなつたのである。この國學の感化力の著しかつた例は多少あるが、かの水戸學の如きも、この國學に反對しつゝその末頃には著しく國學流の色彩を帶びて來た事に徵しても明かである。こと に水戸學最後の大學者栗田寬博士が事實上平田篤胤の學問の繼承者たる觀を呈してゐることでも著しく見らるゝ。この事は私が古史徵開題記の卷頭に載せた文章に說いておいた。

以上述べたやうに、國學はわが國家の精神を明徵にする學問であるから、わが國體が世界に類の無いが如くに世界に類の無い學問である。而して、それはわが國學が生命のある限り、一たび生じた以上決して亡びる學問でないのみなら

ず、又亡してはならない學問である。かくしてわが教學の本義本旨は常にこの學問の研鑽によつて指導せられて行くであらう。かくして、この學問はわが國の教育とは極めて密接な關係を常に保つて行かねばならないものである。それ故に、教育にたづさはるものは必ず一往はこの學の一斑に通ずることを必要とするのである。而して、この必要は國民教育の上に特に著しい。それ故に國民教育に携はる人々は國學の歴史の一斑とその要旨とに通じ、その本旨を以てその教育の精神とせねばならぬ。

私は以上のやうに一般の教育者にこの國學の一斑を知られねばなるまいと忠告する。しかしながら、すべての教育者が皆專門的の國學者になりたまへとまではいはない。たゞ、われ〳〵の望む所はこの國學の本旨とその研究法とその研究的態度とは必ず學んでもらひたいと思ふ。即ちそれは國語の正しい會得がこの學問の第一歩であるといふこと、これは普通教育の上に於いても全然同一の態度を要求せねばならないものである。次にはその研究法として事實の正しい理解を通してその精神を體認することである。次には事實をすべてあるがまゝに正當に認識して曲解せぬこと、又わからぬことをごまかさぬこと、正しい意見があれば師說とても盲從せず、後輩の說とても排斥せぬといふ明朗な態度を常に持すること、又みだりに排他的の態度をとらずして常に他の長を採りてわが短を補ふといふ態度に出づること。しかしながら、その精神といふものはわが　神皇之教を明かにするといふ一點に一切を集注してこれを固く保つて須臾も離れない事である。若し以上の事がまさしく行はれてゐるならば、その人は自ら國學を知らないと云つても國學者と目して差支ないことは我々が谷川士清を見るが如くであらう。

# 六、古史徵開題記について

これは雜誌「上代國文」第一號(昭和九年十一月發行)に載せ、後、岩波文庫の古史徵開題記の卷首に揭げたるものなり。これは文中にいへる如く、國學研究の對象たる古典の概論とそれの研究法の大綱とを鑑みるべき貴重の資料たるものにして一面は古典研究の略史ともいふべし。こゝにこれを實際上の指針として加ふることゝせり。

古史徵開題記は平田篤胤の著である。平田翁の事は誰でも知らぬ人はあるまいが、この翁の說く所は甚だ廣汎で、その意氣が又甚だ盛んであつて、內心之に不服を懷いてゐる人も眞正面からは殆ど、向ふ事が出來ず。若し眞正面から反對して向へば、必ず、この翁の絕倫の氣力と、博大の學識とでいひまくられてしま

つたものである。そこで反對する人はたゞ蔭口的に大山師だ位の事でかたづけてゐたやうである。又翁の學なり道なりに推服した人々も、多くはその古道を說くことの高邁であることゝその引證の博大にして規模の廣汎なことゝに驚嘆してしまつて、その學識の因つて來た所の如何を知らうとはしなかつたやうである。それらの爲であるか、どうかは遽かにいひ難い事だが、事實この翁の學問については後人は殆ど言及しないやうな有樣になつてゐる。これは後進たる我々の怠慢ともいはねばならぬ事であらうが、故翁に對しては誠に申譯の無い事といはねばならぬ。

今、私が卒然として平田篤胤が學者として如何樣の事をなしたか若くは平田篤胤の學者としての力量を見るに足る著述は何であるかと問うたならば、多くの人或は又平田翁について相當に研究してゐる人でも恐らくは直ちに答ふる所を知らぬであらう。それ程に平田翁は學者としての取扱を今の世に受けて居ないと云つてよいと私は思ふ。それで私はこの翁の學術の根柢が如何に深かつたかの實證としてこゝに古史徵開題記を說かうとするのである。

平田篤胤の著述はその數極めて多くて、百餘部千卷に近いだらうと謂はれてゐる。而して、その方面も多端で佛教、儒教、易學、曆學にまで及んでゐるが、その中心は國學であることはいふまでもない。其の國學は、儒佛を排し、俗神道を斥け、國體と神道とを明かにして以て古道を世に闡明し、大道を世に布くことに主眼があつたのであるが、それらはたゞ間口の廣さばかりでなく、根柢が頗る深いものであつたと思はるゝ。根柢の深さが無くては、あれほどの間口の廣い學問がぼろを出さずにすむものでもない。思へば、今日に至つてもまだ、この翁の學問の根柢如何が論ぜられないといふことは一面は翁の不遇のやうであるが、一方から見れば、翁の偉大さが、常人をして窺ひ知ることの出來ないものだといふ感を抱かしめた爲でもあらうか。

今、私は平田翁の國學が學問として深い根柢を有してゐたものであることの證據として、この古史徵開題記をあぐる。これは古史徵の開題記であるから、古史徵を知らねば、この書の由來もわからぬであらう。さうしてその古史徵は古史成文の編纂について一々その基づく所の根柢を示したものであるからして、

古史成文と古史徴とは離るべからぬ關係にあるものである。而してその編せられた古史の成文に基づいて委曲に講述したものが古史傳である。されば、この古史成文、古史徴、古史傳は一體をなすもので、平田の國學の中心とも眞髄ともいふべきものが、この三部一體のものゝ間にやどつてゐるものであるといはねばならぬ。さうして、この古史成文、古史徴、古史傳の成立内容等については種々批評すべき事、いふべき事もあるが、今はすべて、それらは略して開題記の事を述ぶるだけにする。

この開題記の學術的價値について説明に入る前に、私は先づ、現代の學者に如何に見られてゐるかを説かう。黒板勝美博士の國史の研究には次の如く云つてある。先づ總説の中で、

國學の大家として重んぜられてゐる平田篤胤が古史に分け入る柔としての好著古史徴開題記が大に參考となるものでありながら、篤胤はその主張を高調するに熱心なる餘りに、その史學上に於ける功績が宣長に及ばないとは先づ學界の定論といつてよい。

といひ、各説の中では

その著古史徴の附錄ともいふべき開題記は我が國の本源や神代文字に關せる意見を別とし、神代以來氏姓時代まで國史の研究者に善い手引ともなるべき解題書であるけれど、彼が古神道の主張に熱烈なりし爲めに餘りに尚古的思想に陷り、研究的態度を超越したるところありしために、古史徴が、學術的價値に於いて宣長の古事記傳に一籌を輸するは學界の定評となつてゐる。

とある。蓋し、これは公論であらう。われ〳〵も古史の編述については多少の異見をもつてゐる。しかし、それはそれとして、古史徴開題記の價値は十分に認めらるべき筈であるのに、世間が之を認め得ないのは何故であるか、かくの如きは恐らくは公平な態度といふことが出來ないであらう。私は更に溯つて明治時代の碩學小中村清矩博士の國史學の柔に説く所を引いて見る。曰はく

其の書の大かたは、第一、古傳記の本論にて上古より傳來せし我國の本源説なれど、其論少しく高尚に渉り、第二、神世文字の論は見ん人の識見に依りて

信否を定むべければ、此二章は古事記傳の類を見了り學力の附きたる上にて見ん方然るべくや。第三、古史二典の論は則古事記、日本紀を撰ばれし由緣、及び其書の大要を丁寧反覆して、示されしものなれば、必ず熟讀すべし。第三は新撰姓氏錄論にて、古史を明らめんには舊き諸氏の出自をよく明らめずば、え明らめ難き事の論より起して、上古に所謂氏姓の事、及び其に關かる事ども、又此書撰錄の大要を述べ、第四、上件三典に添て、讀むべき書等の論は、五國史、類聚國史、風土記、舊事紀、令、式、格、律、儀式、和名抄、古語拾遺及び其他の古書の大要を述られたれば、翁の其の他の著述の如く專ら、神代の事に關れるものとは事變りて、初學に益ある事多し。但し、所々にはいかにぞやと思はるゝ所無きにしもあらざれど、其は學識の進むまに〳〵自ら辨明せらるべし。此書は元來古史成文といふ著者ありて、其成文の古書の證徵ある事を示したるものなる故に、古史徵と名づけ、開題記は其首卷なり。

とある。これは開題記の價値と共に內容の大略をも說いてゐる。それは大體こゝにいふやうな事であるが、私はなほ少しく自家の觀察を下して見る。

古史成文は正しくいはゞ古史とだけいふべきものであつて、それは元來古事記に倣つて神代から推古天皇の御代までの歷史を編纂する目的を以て著したもので、十五冊在つたとはいふが、刻成せられたものは神代の部三冊である。その以下は脫稿したものか如何は私は知らぬ。さてその古史の正文を如何にして編成したかといふことについて、一々その徵證をあげて示したのが、古史徵である。古史徵の刻成せられたものも刻成せられた成文三卷に相當する部だけである。しかし、古史徵も最初の計畫は推古天皇の御世までの事に亙るものであつたに相違が無いのであつて、それらの徵證として編者が採用する所の古典のすべてにわたつてそれらの解說評論を加へたものがこの開題記である。隨つて開題記といふ名は古史徵に對しての名目であるが、わが國の古典の解說評論としての書として特立する價値を有するものである。しかも、これはたゞの古典の解說評論でなく、古史徵の精神をも誘導してゐるのであるから、當時の一般國學者の研究態度をも見るに足るべきものである。

この書には最初に「古傳說の本論」と題して、わが古傳說の古より傳はれる由と

その貴さとを說いた。これは即ちその古史の總論ともいふべきものである。これには今日から見て多少の訂正を加へねばならぬ點もあらうが、それは時代の進運につれて、新しい眼界が開け、新しい資料が加はつたといふ程度のもので、その說く所は古今に通じて動かぬものである。

次には神世文字の論がある。古傳說を說き、次に文獻の論に入らうとする場合には文字について先づ論せねばならぬことは當然の事である。それ故にこゝに著者が神世の文字の論をなしたことは道理上至當の順序である。たゞ私は不幸にして翁の神世に文字が在つたといふ論をそのまゝ受け入るゝことが出來ない。それ故にこの結論には反對する事になる。しかし、文字の有無の論をもせずして直ちに文獻を論ずる如き非論理の態度をとらなかつた著者の周到なる態度と用意とは學ぶべきことであらう。

次には古史二典の論と題して日本紀、古事記を論じてゐるが、これには漢字を我國で用ゐられた事からはじめて、日本紀の撰述、文體、又よむ人の心得等を說き、次に古事記の撰述、文體及び、一般の古典の記述法に及び、又紀記の研究をなせる書にも論及した。而してこれらの論說の中には私共の贊成しかぬる點が少しも無いとはいはないが、概していふ時に、當時はもとより近頃までも、これ以上にこの二典を說き得たものは多く無かつたのであつて、苟くも古典を論ぜむとするには必ず一往見ておかねばならぬものである。

次に新撰姓氏錄の論である。こゝには紀記二典の事實をよく明かに知らうとするには、舊き諸氏の出自をよく明めなければならぬ事から論を起して姓氏錄の撰述に及び更に姓氏に關しての一般的の論に及んでゐる。凡そ新撰姓氏錄に關して、詳細にしかも正確に論じたものは、古にも之にまさつたものはなく、この後にも之に及ぶものも無い、而して、この姓氏錄を紀記二典と相並んで重要なものであると認めたことは、これは破天荒の見解でしかも動かすべからざるものである。誠に古代のわが國家の組織に關して正確な認識を得ようとするものは氏族の實際に通曉せねばならぬものである。この點については平田翁はまことに偉大なる見識を有してゐた人であるといはねばならぬ。

次に上件の三典に添へ讀むべき書等の論として、

續日本紀より以下三代實錄までの正史のこと、

類聚國史のこと、

古風土記及び古風土記逸文のこと、

舊事紀のこと、これは僞書ではあるが、その內の天孫本紀、國造本紀は正しい古書に依つたものだと論じてゐる。

令、式、格、律のこと。令には令義解、令集解、逸令、唐六典などに論及し、律には律疏、金玉掌中抄、裁判至要抄、法曹至要抄、逸律、唐律疏義のことに及び、格では類聚三代格、格逸のことから、政事要略、朝野群載、類聚符宣抄などに及び皆その要を得てゐる。式には諸司の式及び諸の儀式の典籍に及び、詳細に論じてゐる。

倭名類聚鈔のこと。こゝにはわが國の辭書の事に論及し、新撰字鏡、類聚名義鈔、字鏡集、以呂波字類鈔、難字記、平他字類鈔等より一切經音義等に及んでゐるが、倭名類聚鈔に關しての一般論としては、近頃あらはれた古鈔本の事を別にしていへば、これ以上加へ又は訂すことは要しない程正確詳細なものである。

最後に古語拾遺を論じてゐるが、この書を以て最後においた、その微意まことに諒とすべきものであるが、その論また大に見るべきものがある。

以上は古史徵開題記にあげた所の古典の要目であるが、これは實に推古天皇時代までの事を徵すべきわが國の現存の古典についての總括的見解を論述したものであつて、この書以前にかやうな著述は一もないのである。しかのみならず、今日に至つても、古典概說として之に匹敵するものは一も存しない。もとより時代の進步は部分的には訂正を要する點が無いとはいはれないが、それは時世の勢である。とにかく古典概說としては空前の大著といはねばならぬのみならず、今日でも、全體的に之を凌駕するものは無い。

平田篤胤は純神道の主張鼓吹宣傳に熱中せる極めて情の烈しい人として考へられて、本書の如き冷靜な著述の有るのは寧ろ意外と世人に思はるゝかも知れないが、この人は決して根柢なくしてさやうな論とか宣傳とかをしたのでなくして、その古典に對しての正確な研究は尋常の學者の企て及ぶことの出來ない努力と造詣とを有したことはこの開題記によつても明かに證明せらるゝもので、篤胤の學者としての價値は實にこの開題記によつて判定することが出來

るであらう。しかも、今日に於いてもこの開題記を無視しては古典を論ずることの出來ないものである。然るに、古典研究の聲大なるに關せず本書を顧みる人の殆ど無いのは奇怪な事である。

そこで、私は平田翁のこの學問の繼承者が誰であつたかを見ると、この後繼者としては鐵胤翁が中心として立たれ、明治維新前後には平田學が日本全國を震撼したものであつた。しかし、鐵胤翁は遺憾ながら、この國學の學問的根柢を深むるといふ方面には活動せられなかつた。又篤胤の古史傳が、第二十九卷の半ばまでゞ中絶したのを三十七卷まで續稿を起したのは篤胤歿後の門人矢野玄道である。それ故に、この點からいへば、矢野玄道こそ平田の學を繼承した人といふべきであるやうであるが、それも古史傳の續稿には大なる功績のあつたことは勿論であるけれど、國學の學問の根柢を深め行くといふ方面には大きなことを成してゐるとはいひ得ないものである。然らば平田翁のこの古典の根本的研究は終に後繼者を得なかつたものゝ如くである。然れども、私はこゝに世人が意外に思ふであらうところの大學者一人を以て實際上平田の國學の根柢を深むる意味での後繼者と目してよいとするものである。これは誰であるかといふに水戸の大學者栗田寛博士である。

栗田先生は大日本史最後の完成者として尊重せらるべき偉人であるが、私は古史徵開題記に說く所の平田篤胤の學問の後繼者とも目しうることを信ずるものである。それを知るには、開題記の說く所と栗田博士の業績とを比較すればわかるのである。

古史徵開題記の中に說く所の古典には當時既に研究の行はれてゐたものも少くないが、未だ研究の行はれなかつたものもある。それらについて精細な研究を誰人かが行はなければならぬと要求せられたに相違ない。それ故にさやうなものには平田翁は或は他に要求し、或は自らの志を述ぶるなど特に心をこめて說いてゐる。それらのうちでも平田翁が紀記二典に並べて必要だとした新撰姓氏錄には頗る力を籠めて論じてある。かくの如くこの新撰姓氏錄は平田翁が貴重な古典とせられたものであるけれど、古來之を明確に考證したものが無かつたのである。然るに、後に、この平田翁の精神を體してこれの考證をも

のしたのは栗田博士の新撰姓氏錄考證二十二卷の大著である。これは實にこの點に於て空前絕後の大著で、まさしく平田翁の志を濟したものといふべきものであるが、この考證には著者の序論といふものが無くて、實にこの古史徵開題記の新撰姓氏錄の部を殆どそのまゝ採錄してあるのである。それを今少し委しくいへば、多少節略した點もあるが、そのはじめに、

この姓氏錄の事につきて古人の校正したるも多くあれど、其の大體に深く思をとゞめて論へるは平田氏(篤胤)の古史徵開題記にしるせるぞいとすぐれて覺ゆれば、此序文の注釋はみな之をとれり。そが中に間〻愚考を加へたる所もあり。

とあつて、栗田博士の說をいさゝか加へたる所もあれど、百中九十九までそのまま轉載したものである。たゞその末に平田翁が之を抄錄本でないといはれた事に對して栗田博士はそれが抄錄本であることの論證を加へられた點があるだけの事である。之を以て見れば、これは平田の學との關係が密接な事を明かに示してゐるといはねばならぬものである。

次には古風土記をば重い古典として平田翁自らもその古風土記の逸文を編輯した由に見えてゐるけれど、これは完成したかどうか明かでない。栗田博士が標注古風土記一卷を纂訂し、古風土記逸文二卷を編纂し、更に古風土記逸文考證八卷を著していづれもこれを出版せられたのは恰も平田翁の志を濟したものと見らるゝものである。しかし、かやうな企は狩谷棭齋も伴信友も行ひ、それらの著も傳はつてゐるから、これは强ち平田翁の後繼的行動と見なければならぬといふ譯でないかもしれぬ。

平田翁は舊事紀の論に於いて、これを僞書だとする點は、國學者一般と異なるものではないが、

中にも全くと云ばかり採り用ふべきは師も言れたる如く天孫本紀といふ篇と、國造本紀となり、天孫本紀は決めて物部氏の纂記を採りて載せるならむと所思たり。

といつて說く所があるが、栗田博士の著には物部氏纂記三卷と尾張氏纂記一卷と國造本紀考六卷とがある。この三はこの開題記に源を發してゐるものであ